



301  
40

全  
譯  
芥  
子  
園  
畫  
傳

第  
十  
三  
冊  
銅  
毛  
花  
卉  
譜  
(下)

始



301  
46

全 譯

芥子園畫傳

第十三冊

翎毛花卉譜

(下冊)



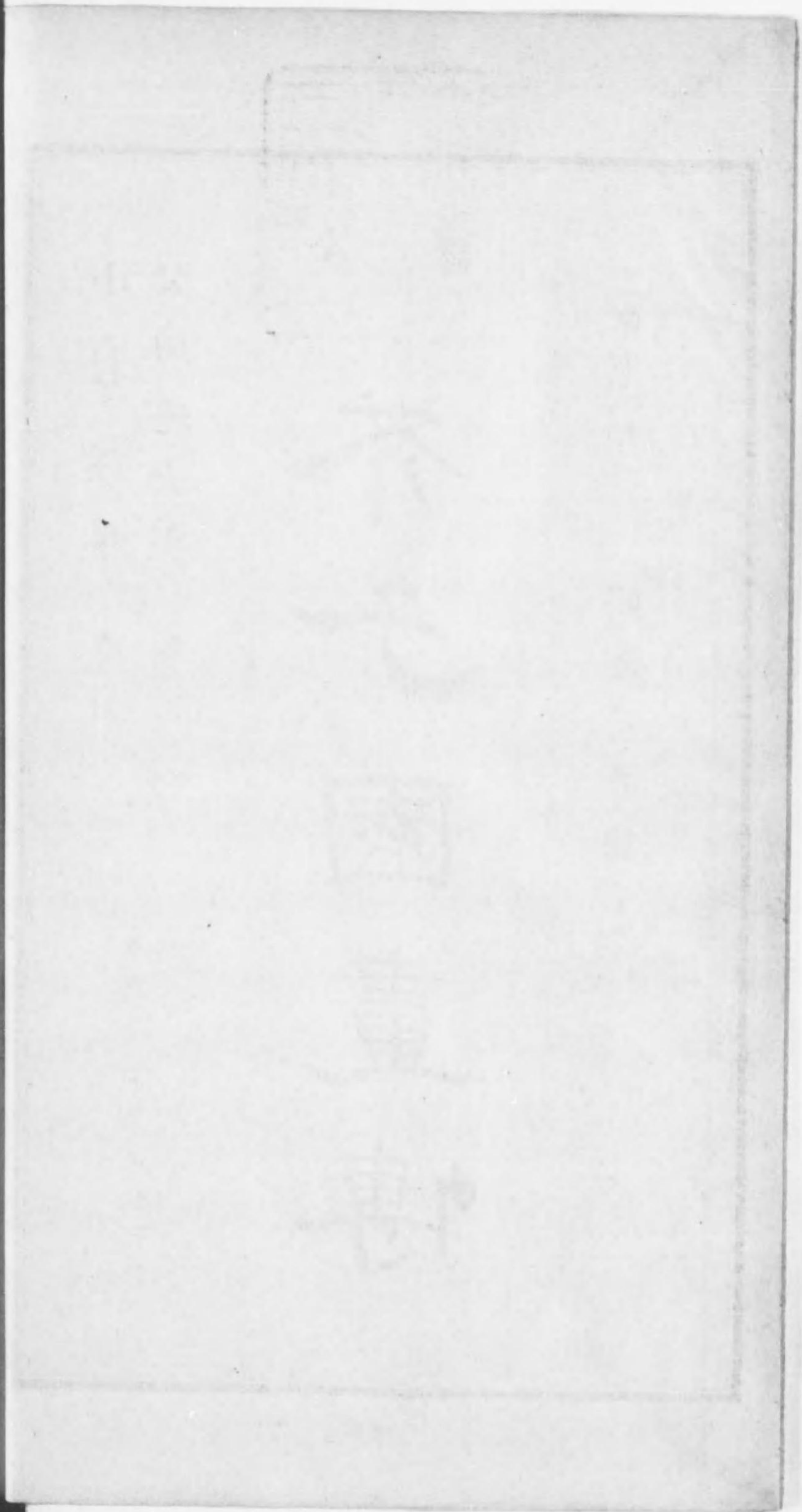
小杉放庵 註解  
公田連太郎 譯文

芥子園畫傳



東京アトリエ社刊行

第十三冊 翎毛花卉譜(下冊)



芥子園畫傳第十三册翎毛花卉譜下冊目錄

玉樓春	做于錫畫 王安節題	八	葡萄	做趙昌畫 韓昌黎句	三
桐子	一名葡萄 做吳元瑜畫 劉夢得句	一〇	櫻桃	做徐熙畫 白樂天句	三
西府海棠	做唐忠祚畫 鄭谷句	三	白牡丹	做黃筌畫 苑景仁句	三六
黃鸝春柳	做邊文進畫 劉後村句	四	榴花	做沈孟堅畫 溫飛卿詩	元
木芙蓉	做刁光畫 王介甫詩	一六	梨花白燕	做沈賢畫 王宓草題	四〇
蠟梅	做錢選畫 楊誠齋句	一八	佛手柑	做朱紹宗畫 王孫穀句	四二
虎刺秋菊	做丘慶餘畫 王又唐句	二〇	牽牛花	做滕昌祐畫 王宓草題	四四
荔枝	做吳公器畫 康伯可詞句	三	山茶	做易元吉畫 蘇東坡句	四六
茶葉花	做崔愨畫 苑希文句	二四	繡毬	做韓祐畫 宗梅岑句	四八
玫瑰	做徐熙畫 陳石亭句	二六	紫薇	做呂紀畫 陳石亭句	五〇
桐實	做陶成畫 王安節題	二八	黃木香	做葛守昌畫 梁元帝句	五二
黃薔薇	做趙文淑畫 劉綬句	三〇	紅白桃花	做沈賢畫 邵康節詩	五七

烟	煤	.....	一九
靛	花	.....	二〇
藤	黃	附深綠、濃綠、 嫩綠、最嫩綠、 .....	二二
赭	石	附鐵色、醬色、 檀香、 蒼綠、老紅、 .....	二四
配合衆色	.....	.....	二六
和	墨	.....	二八
礬	絹	.....	二九
礬	石	.....	三三

### 畫傳三集卷末 設色諸法

綠	牡丹	.....	五
杏	子	做趙昌畫 徐長句 .....	五
秋池	翠鳥	做林良畫 宛菴句 .....	六
金絲	桃	做李迪畫 梅聖俞句 .....	六
紅	葉	做林椿畫 王司直題 .....	六
垂枝	海棠	做殷宏畫 沈雪江題 .....	六
杏	燕	做梁廣畫 截鄭谷律句 .....	六
凌霄	花	做崔白畫 鄭谷句 .....	六
銀	珠	.....	七
石	綠	.....	九
石	青	.....	九
泥	金	.....	九
雄	黃	.....	九
傅	粉	附著粉、染粉、 絲粉、點粉、襯粉、 .....	一〇〇
調	脂	.....	一〇〇
石	榴	做夏侯延所畫 潘尼賦句 .....	七
玉	蘭	做徐崇矩畫 白樂天詩 .....	七
薔	薇	做艾宣畫 陳石亭句 .....	七
雪	梅	做徐熙畫 杜少陵句 .....	七
茶	梅	做黃居寀畫 沈因伯題 .....	八
蘆	雁	做趙宗漢畫 王孫毅題 .....	八
丹	桂	做劉永年畫 李巨山詩 .....	八
魏	紫	做易元吉畫 劉賈父句 .....	八
桃	黃	.....	八

衆花分爲二譜。先草本。次木本。草蟲翎毛。各以類從。草蟲已見於前編。則翎毛宜載於是帙。條分縷晰。交相發明。至譜中鈎勒著色。武林王諸二先生。詳訂於前。橋李三王先生。增輯於後。雖屬五美交併。亦復後來居上。此集創始於壬戌。告成於辛巳。歷二十年。方得梓傳。字丙。集中區別源流。裁篡古法。爲訣爲式。則仲氏宓草一人爲之。不惜金針。度後人其功深矣。

【譯】衆花は分ちて二譜と爲し、草本を先にし、木本を次にし、草蟲・翎毛、各々類を以て從ふ。草蟲は已に前編に見ゆれば、則ち翎毛は宜しく是の帙に載すべし。條分縷晰して、交々相發明す。譜中の鈎勒著色に至りては、武林の王諸二先生、前に詳訂し、橋李の三王先生、後に増輯す。五美交々併せたるに屬すと雖も、亦復た後に來るもの上に居る。此集は壬戌に創始し、成を辛巳に告ぐ。二十年を歴て、方めて字内に梓傳するを得。集中、源流を區別し、古法を裁篡して、訣と爲し式と爲すは、則ち仲氏宓草、一人、之を爲し、金針を後人に度すを惜まず。其功深し。

【註】條分縷晰、晰は析に作るを正しとす。事柄を細かく區別して詳かに説くこと。○王諸二先生、王蘊菴・諸曠菴をいふ。○橋李、地名、今の浙江省嘉興縣に在り。底本には橋を樞に作る、誤なり。○三王先生、王安



節・王密草・王司直をいふ。○後來居上、史記に、陛下、群臣を用ふることを、薪を積むが如きのみ。後に來るもの上に居る、とあるに本づく。○壬戌、康熙二十一年。○辛巳、康熙四十年。○梓傳、印行すること。○裁纂、裁奪又は定奪といふが如し。其可否を量度して斷決するなり。取捨すること。○金針度後人、秘訣を後世の人に傳授すること。

玉樓春(子錫の畫に倣ふ、  
王安節の題)

國色從來比西子。天香原  
不借東風。

國色、從來、西子に比す。天  
香原東風を借らず。  
解 玉樓春は、千葉の牡丹  
の一種。國色は一國に於て  
無比無き美人なり。牡丹の  
艶麗なるをたとふ。西子は  
西施なり。吳王夫差の寵姫  
なり。東風は春風。松窓雜  
錄に曰く「唐の玄宗、内殿  
に牡丹を賞し、侍臣陳正己  
に問うて曰く、牡丹の詩、  
誰か稱旨と爲すと。奏して  
曰く、李正封の詩に云ふ、  
國色朝酣酒、天香夜染衣  
と。牡丹を國色天香と稱す  
ること、ここに本づく。



國色從來比西子天  
香原不借東風





梔子（一名薝蔔、吳元瑜の畫に倣ふ、劉夢得の句）

色疑瓊樹倚。香似玉京來。  
色は瓊樹の倚るかと疑ひ、香は玉京より來るに似たり。  
解 二句は花の色美しくしきと香の芳しきを詠するなり。瓊樹は美しき玉の樹。南史に、其曲に玉樹後庭花・臨春樂等あり、其略に云ふ、壁月夜夜滿ち、瓊樹朝朝新なりと。昔、張貴妃・孔貴嬪の容色を美するなりと。瓊樹の二字は此れに本づく。玉京は、天帝の居る所、轉じて京師のことにも用ふ。劉禹錫は、唐の中山の人、字は夢得。進士を以て博學宏詞科に登り累官して集賢殿學士に至り出でて蘇州の刺史と爲り、太子賓客に遷る。元和の初、

王叔文に附くを以て貶せらる。韓愈・柳宗元、皆、之と善し。其文は韓柳の外に於て自ら軌轍を爲す。詩も亦精銳なり。著はす所、劉賓客集四十卷あり。

色疑瓊樹倚香似  
玉京來



西府海棠（唐忠祚の畫に倣ふ、鄒谷の句）

體質最宜新雨後。嬌態全在欲開時

體質は最も新雨の後に宜し、嬌態たるは全く開かんと欲する時に在り。

解 西府海棠は海棠の一種嬌態は、うつくしくなまめかしきこと。開かんと欲する時とは半開の時なり。此句は唐の鄒谷の律詩の第三第四の二句を用ひたる也。後の垂絲海棠の題讚は、同じ詩の第一第二第七第八の四句を載りて用ひたるなり。原詩には體麗最宜、新著二雨。妖態全在半開時に作る。古人の句を引用するに勝手に改竄すること、支那人の中古以來の惡癖なり。



體質最宜新雨後  
嬌態全在欲開時



黃鸝存柳 (邊文進の畫に  
倣ふ、劉後村の句)

樹裏窺人半在空。

樹裏に人を窺うて半ば空に在  
り。

解 黄鸝がしたれやなぎの  
幹にとまりたるを詠ずるな  
り。樹裏は樹のうち。



樹裏窺人半在空



木芙蓉(刁光の畫に倣ふ、  
王介甫の詩)

風露商量借膏沐。 腦支深  
淺入肌膚。

風露商量して膏沐を借し、  
腦支深淺、肌膚に入る。

解 此は芙蓉の花の美く  
しきことを詠じたるなり。

商量は相談すること。膏沐  
は、紅をつけたり髪を洗つ  
たりしてお化粧すること。

借は貸すなり。此處はか  
と讀まず。腦支は腦脂と同  
じ。王安石は、宋の臨川の

人、字は介甫、半山と號す。  
博覽強記、神宗の時、相と  
爲り、荆國公に封ぜらる。



風露商量借  
膏沐腦支深淺  
入肌膚



蠟梅（錢選の畫に倣ふ、  
楊誠齋の句）  
來從眞蠟國。自號小黃香。  
眞蠟國しんらふこくより來り、自ら小黃  
香と號す。  
解 眞蠟國は、カンボヂヤ  
なり。小黃香は蠟梅の異名  
なり。



本從眞蠟國  
自號小黃香  
三〇七

翠華綴米實金英  
吐白華



虎刺秋菊（丘處餘の畫に倣ふ、王又唐の句）  
翠華綴米實。金英吐白華。  
翠葉、朱實を綴り、金英、白華に吐く。

解 虎刺は、一名壽延木、和名ありどほし。翠葉、朱實を綴るは、虎刺を詠じ、金英、白華に吐くは、秋菊を詠じたるなり。金英は菊の花の蕊の黄色なるをいふ



荔枝 (吳公器の畫に倣ふ、  
康伯可の詞句)

香玉滿包仙液。綉紅圓簇  
鮫綃。

香玉滿ちて仙液を包み、綉紅  
圓くして鮫綃なる。  
解 荔枝の實を詠じたるな  
り。第一句は荔枝には甘美  
なる汁多きをいふ。香玉は  
荔枝をいふ。第二句は荔枝  
の形と色をいふ。綉は縮  
よりの強き絲にて織りて織  
を寄せたる布帛。鮫を形容  
する也。紅は實の色をいふ。  
圓は其形なり。鮫綃は、遠  
異記に、南海、鮫綃を出す、  
一名龍紗。以て服と爲せば  
水に入れども濡はず、とあ  
り。吳公器は即ち吳元璋な  
り。



香玉滿包仙液  
綉紅圓簇鮫綃

信

茶葉花（崔慈の畫に倣ふ、  
范希文の句）

露芽錯落一番榮。綴玉含  
珠散嘉樹

露芽錯落として一番榮え、玉  
を綴り珠を含んで嘉樹に散す  
解 茶葉花は茶の樹の花な  
り。露芽は露を帯びたる芽、  
茶の名品に露芽といふ者あ  
れども、今は文字のままに  
讀むべし。玉を綴り珠を合  
むは、茶の花を形容するな  
り。第一句は枝葉を詠じ、  
第二句は其花を詠する也。  
范仲淹は、宋の吳縣の人、  
字は希文、大中祥符の間、  
進士に擧げられ、仁宗の時、  
韓琦と兵を率ゐて同じく西  
夏を拒ぎ、朝廷の倚重する  
所と爲る。召して樞密副使  
に拜せられ、參知政事に進  
む。秀才たる時嘗て言へら  
く、士は常に天下の憂に先  
だちて憂へ、天下の樂に後  
れて樂しむべしと。其の天  
下を以て任すること此の如  
し。卒して文正と諡す。

露芽錯落一番榮  
綴玉含珠散嘉樹  
范仲淹





玫瑰まいくわい（徐熙の畫に倣ふ、陳石亭の詩）

隔葉紅先見。榮條色自明。方攀隨密刺。細嚼愛芳英。

葉を隔てて紅先づ見え、條を攀りて色自ら明かなり。方に攀きて密刺に隨ひ、細嚼して芳英を愛す。

解 第一句第二句は、玫瑰の花の色を言ひ、第三句第四句は花の芳香を詠するなり。攀は手を以て引きて折るなり。密刺は枝に刺多きを言ふ。芳英は芳香ある花。

陽華紅先見榮條  
色自明方攀  
嚼愛芳英  
詩 蘇



桐實 (陶成の畫に倣ふ、  
王安節の題)

濃緑蔽身葉有聲。

濃緑に身を蔽して葉に聲有り  
解 濃緑は葉の色なり。身  
は桐の實をいふ。葉に聲有  
りは、桐の葉の微風に吹か  
るる音をいふ。

濃緑蔽身葉  
有聲

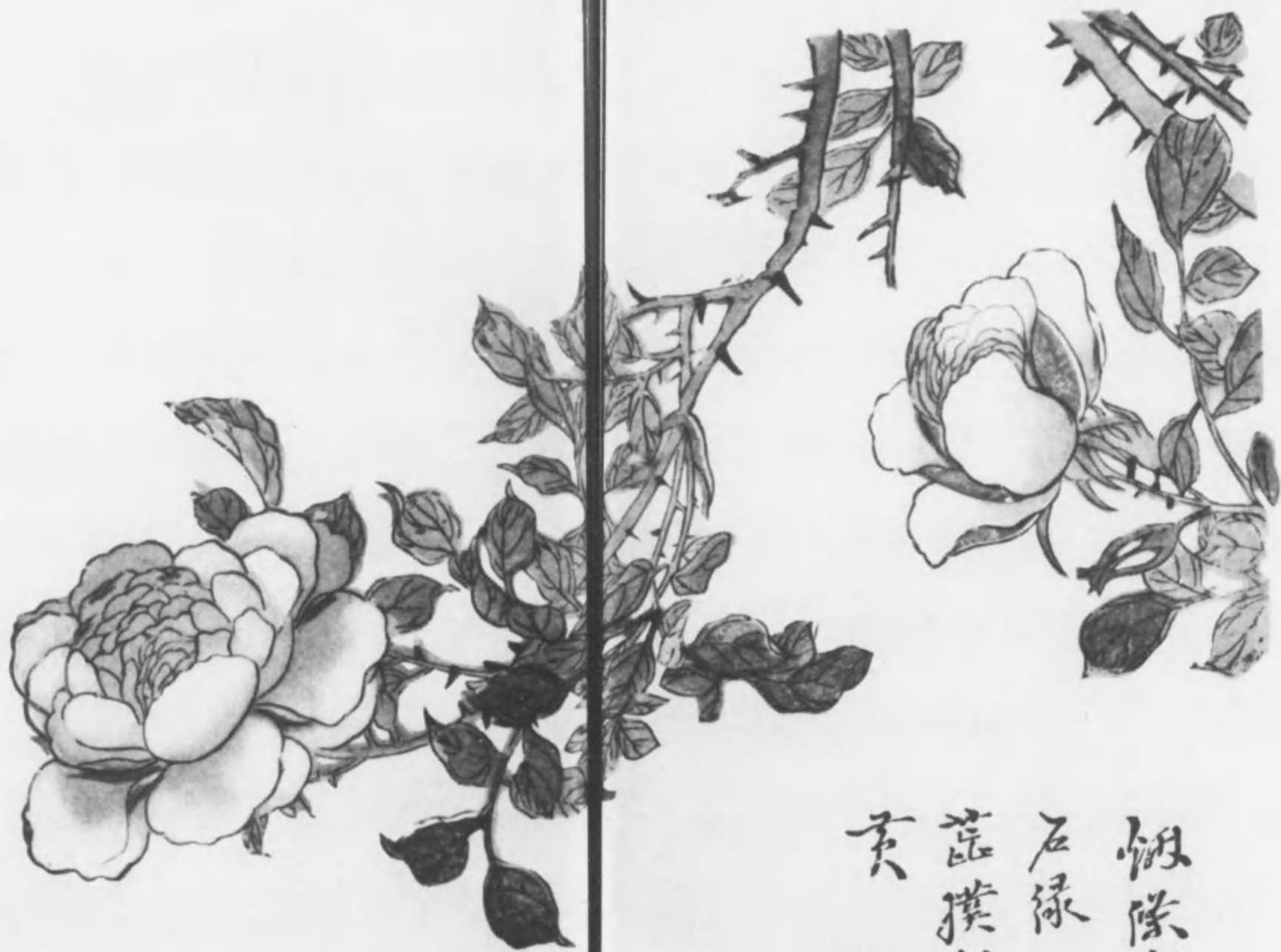


黃薔薇 (趙文淑の畫に倣ふ、劉瓊の句)

烟條塗石綠。粉蕊撲露黃。

烟條、石綠を塗り、粉蕊、露を撲つ。

解 黃薔薇は、黄色なるいはら。第一句は枝の緑色なるを言ひ、第二句は花の黄色なるを言ふ。烟條は枝を形容するなり。石綠は綠青。粉蕊は花粉ある蕊。露黃は美しくき黄色。鶯兒は色黄なり。故に嬌美なる黄色を通稱して露黃と曰ふ。



烟條塗  
石綠粉  
蕊撲露  
黃



葡萄 (趙昌の畫に倣ふ、  
韓昌黎の句)

若欲滿盤堆馬乳。莫辭添  
竹引龍鬚。

若し滿盤に馬乳を堆くせんと欲せば、竹を添へて龍鬚を引くを辭する莫かれ。

解 馬乳は葡萄の一種なり龍鬚は葡萄の蔓をいふ。この句は、韓退之が葡萄を詠じたる絶句の轉結の二句にして、原詩は寓意あるを以て、讀むに足る者なるを、ここに題辭として此二句を選擧したるは、つまらぬ思ひ付きなり。實は唯だ此れのみならず、此書中の題辭多くはおもしろからず、吾は之を註解するを喜ばず。撰者が文學に於ける造詣の深からざるを顯るに足る。惜むべし。

若欲滿盤  
堆馬乳莫  
辭添竹引  
龍鬚



櫻桃 (徐熙の畫に倣ふ、白樂天の句)

鳥偷飛去街將火。人摘爭時踏破珠。

鳥偷ぬす飛去と街將か火。人摘と爭あ時と踏ふ破く珠。  
櫻桃は、みざくら。本集には去を處に作る。従ふべし。鳥が櫻桃を偷んで飛び去るは、火を口にくはへたるが如く、人が争うて摘むときは、珠を踏み破るが如し。火を街が將つとは、櫻桃の赤きを火にたとへ、珠を踏み破るとは、櫻桃の圓きを珠にたとへしなり。

鳥偷飛去街將  
火人摘爭時踏破  
珠



白牡丹（黄筌の畫に倣ふ、  
范景仁の句）

未放香噴雪。仍藏蕊散金。

未だ放かざるとき香、雪を噴  
き、仍ほ藏す蕊、金を散する  
を。

解 第一句は白牡丹の花の  
白くして雪の如きを言ひ、  
第二句は蕊の黄色にして金  
の如きを言ふ。



未放香噴雪  
仍藏蕊散金

范景仁

榴花（沈孟堅の畫に倣ふ、  
温飛卿の詩）

葉亂裁殘綠。花宜挿鬢紅。  
蠟珠攢爲蒂。細彩剪成叢。

葉亂れて残を裁して緑に、花は宜しく鬢に挿みて紅なるべし。蠟珠攢めて蒂と爲し、細彩剪りて叢を成す。

解 榴花は、ざくろの花。  
第一句は葉の緑色なるを言ひ、第二句は花の紅なるを言ひ、第三句は蒂を言ひ、第四句は枝を云ふ。裁は文書を書きつけるに用ふる紙又は帛をいふ。蠟珠は蠟涙なり。細彩は本集には細線に作る。淺黄色なる織物。温飛卿は、本名は岐、字は飛卿、唐の太原の人、少にして敏悟、詞章に工なり。李商隱と名を齊しくす。これは海榴の律詩の第三第四第五第六の四句を摘録したるなり。

葉亂裁殘綠花宜  
挿鬢紅蠟珠攢作  
蒂細彩剪成叢



梨花白燕（邊覺の畫に倣ふ、王宓草の題）

夜照金波惟見影。香銜白燕只聞聲。咏梨花句也。素心稀。遁入梨花無是非。梨花白燕詩既互舉。畫應合圖。

夜、金波照らして惟だ影を見る、香、白燕を銜んで只だ聲を聞く。梨花を咏する句なり。白燕を咏する句に云ふ有り。夕陽憑りて弔す素心稀なり、遁れて梨花に入り是非無し。梨花白燕の詩既に互に舉ぐ。畫は應に合はせ圖すべし。  
解 これを夜、梨花も白く白燕も白くして、見分け難き趣を詠じたるなり。金波は月の光を謂ふ。漢書に月影以金波とあるに本く。





香は梨花の芳香をいふ。素心とは心地潔白なるなり。素は白きなり。梨花白燕共に白きを以て素心の字を用ひしなり。是非無しとは、是と非と彼と此との區別を超越することなり。ここには梨花と白燕との辨別し難きを言ふ。

夜照金波惟見  
影香銜白燕只  
聞聲咏梨花句  
也冰白蕖句有  
云夕陽憑吊素  
心稀遁入梨花  
無是非梨花白  
燕詩既互舉畫  
應合圖



佛手柑 (朱紹宗の畫に倣ふ、王孫殿の句)

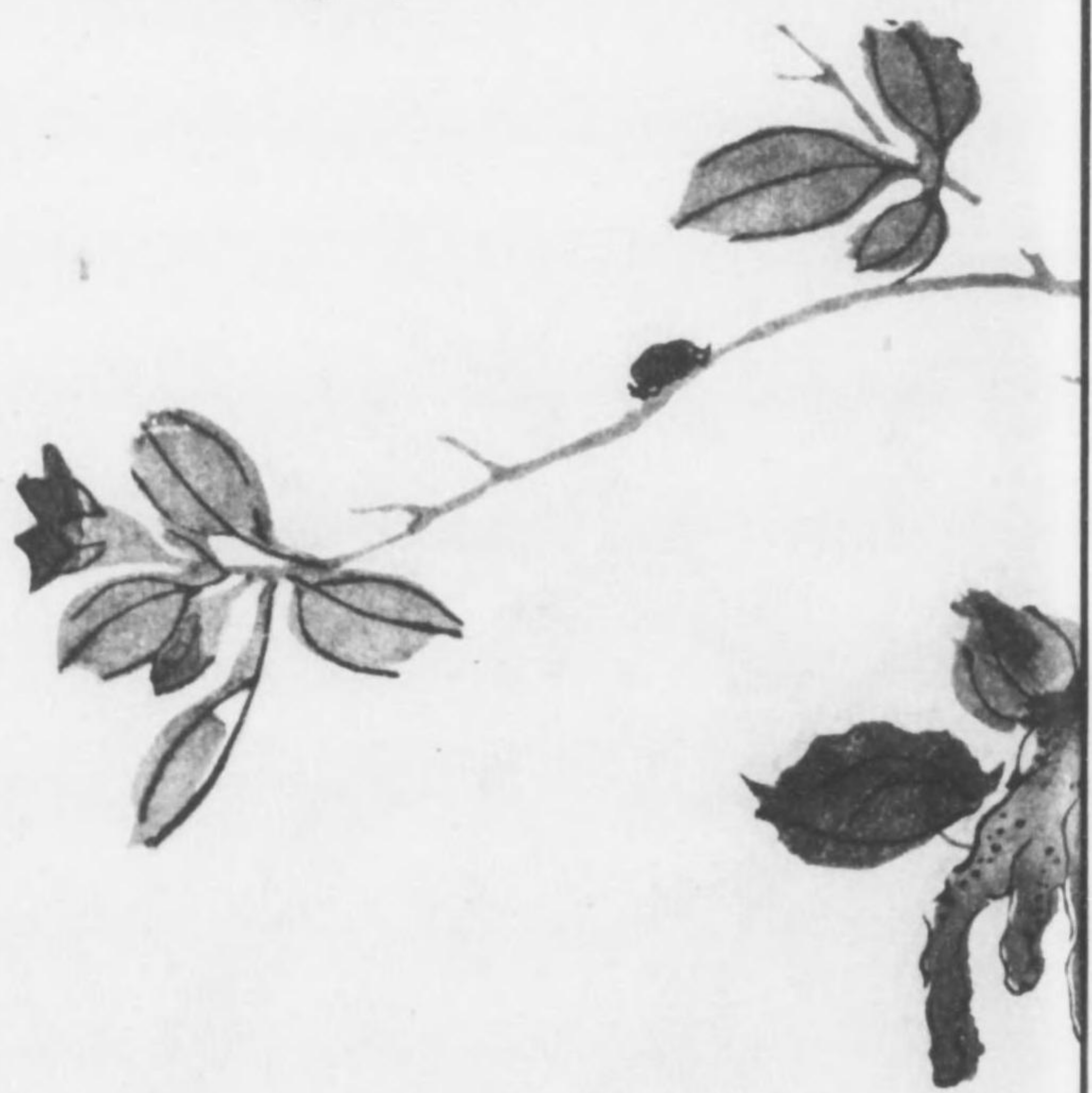
香合佛手指生月。露冷金僊掌帶霜。

香、佛手に含んで、指、月を生じ、露、金僊に冷かにして、  
掌、霜を帯ぶ。  
解 佛手柑の名によりて此句をつくれるなり。指、月を生ずは、劉得仁の詩の佛手生月。指より脱化したるものなれども、これは圓覺經に修多羅の教は月を標する指の如しと曰へるを換りたる者と見るべし。佛手によりて指を出し、指によりて月を出したるなり。作者は工夫を凝らしたる者にして、得意の作なるべけれども、今日の吾等より觀れば畢竟文字の遊戲に過ぎず、感興を動かすに足らず。金僊は佛をいふ。宋の朱紹宗は、籍、畫院に録し、人物猫犬花禽、描寫精逸にして、  
愜く沈寢に倦く。



蕭舍映中  
松生月露  
冷金澗掌  
帶霜

百景圖



牽牛花 (藤昌祐の畫に倣ふ、王念草の題)

柔藤高附亦凌霄。玉露涓涓滴翠梢。不用金莖承露盡。花形自具小柴窠。

柔藤高く附き亦霄を凌ぐ。玉露涓涓として翠梢に滴る。用ひず金莖の承露盡を。花形自ら具ふ小柴窠。  
解 第一句は牽牛花の蔓を言ひ、第二句は露の滴るさまを言ひ、第三第四句は、花の形を言ふなり。柔藤はやはらかなる蔓。玉露は玉の如き露。金莖は、銅の枝なり。以て承露盤を架ぐる者なり。承露盤は承露盤なり。漢の武帝、銅を以て承露盤を作り、高さ二十丈、大さ十圍、上に仙人有り露を承くるを掌り、玉屑に和し

柔藤高附亦  
凌霄玉露涓  
涓滴翠梢不  
用金莖承露  
盡花形自具  
小柴窠



詩  
卷  
一  
三  
十

て之を飲み、以て仙を求めたり。柴密は、陶器の寶貴なる者。世に傳ふ、柴世宗燒き造ると。司る所、其色を請ふ。御批して云ふ、雨過ぎて天青し雲破るる處、這般の顔色做し將ち來れと今、磁器の雨過天青色なる者は、皆、柴密に倣ふ。或は曰く、器を製する者、姓は柴、故に柴密と曰ふと。



山茶（易元吉の畫に倣ふ、蘇東坡の句）

葉厚有稜犀角健。花深少態鶴頭丹。

葉厚く稜有り犀角のごとく健なり、花深く態少く鶴頭のごとく丹し。

解 山茶は、つばき。第一句は、山茶の葉の厚くして健きことを詠じ、第二句は花の色赤き態を詠じたるなり。これは東坡の七言律の第三第四の二句を抄録したるなり。



葉厚有稜  
犀角健  
花深少態  
鶴頭丹



繡毬しゅうぎ (韓節の畫に倣ふ、宗梅岑の句)

珠攢綽約。月弄圓圓。

珠攢たままりて綽約しやくやくたり、月弄だんらんして圓圓だんらんたり。

解 繡毬は、おぼでまり。

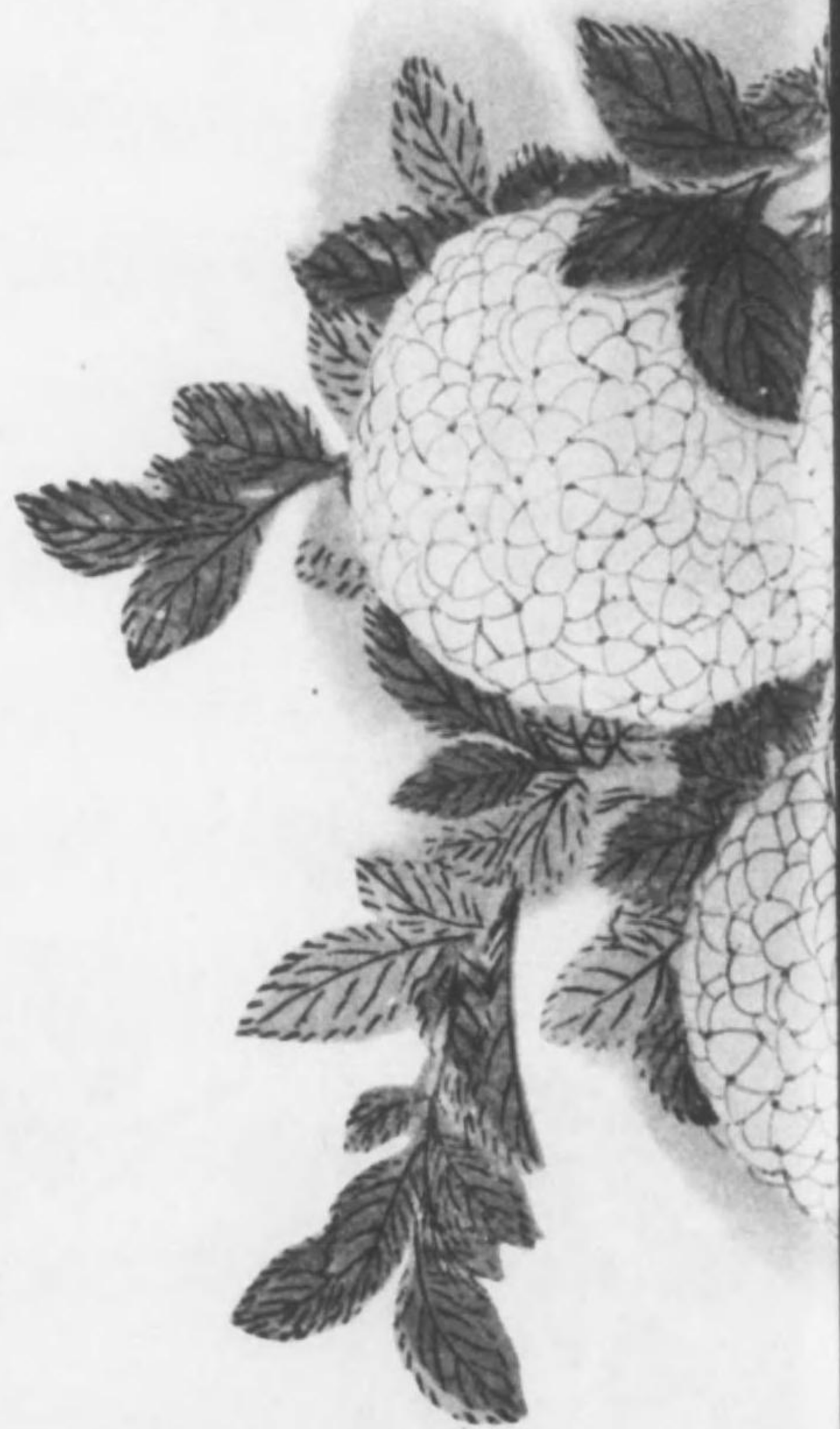
此二句は、おぼでまりの花の圓きを形容するなり。綽約は、しなやかなるさま。

圓は多数の花の圓くあつまりたるさま。





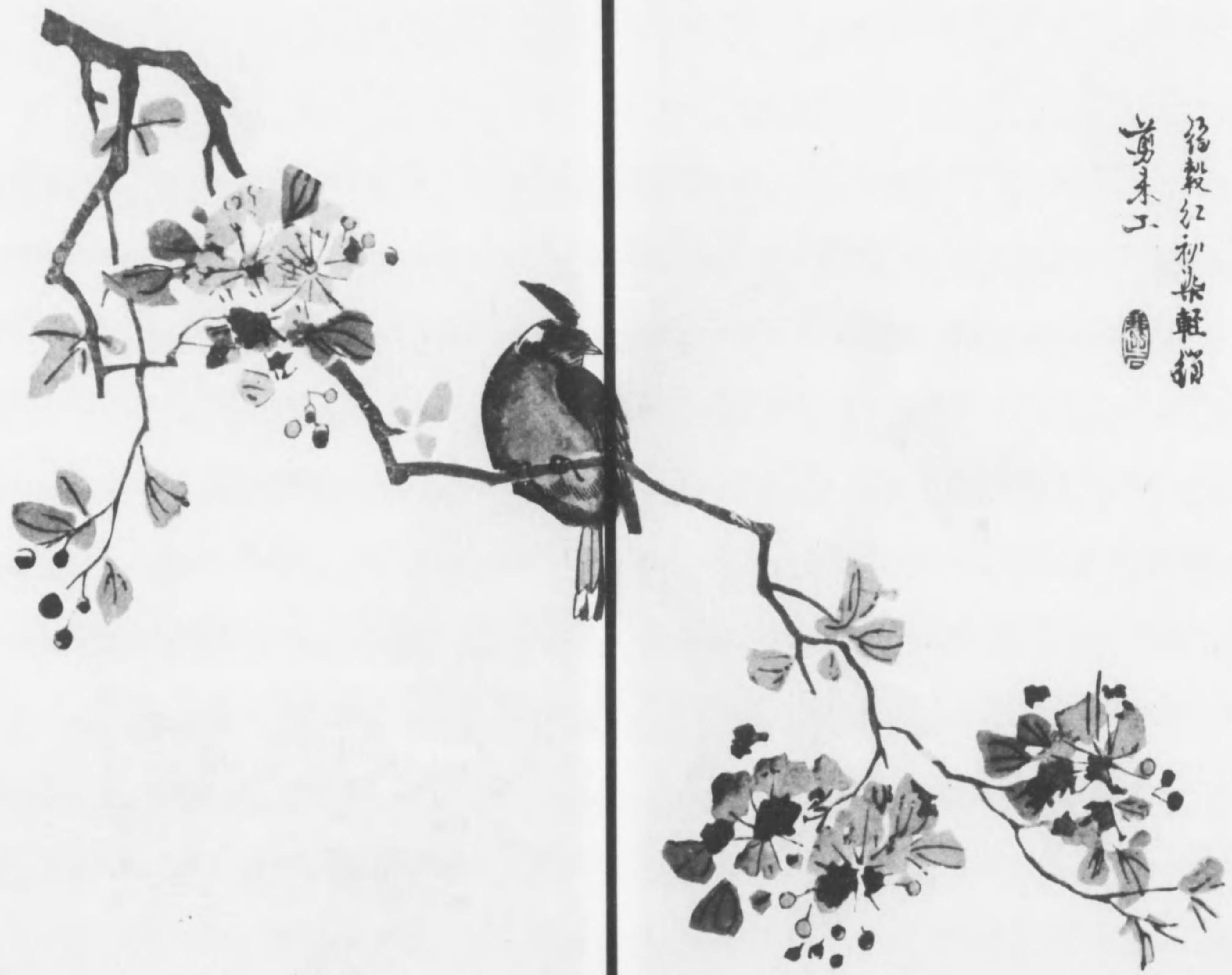
珠攢綽約  
月弄團圓



紫微 (昌紀の畫に倣ふ、  
陳石亭の句)

縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。  
縹緲紅初染。輕梢剪未工。

縹緲紅初染輕梢  
剪未工



黄木香 (葛守昌の畫に倣ふ、梁の元帝の句)

横枝斜縮袖。嫩葉下牽裾。

横枝斜に袖を縮つむぎ、嫩葉しほ下に裾を牽ひく。

解 黄木香は黄色なるもくかうばら。これは梁の元帝の餘韻を詠じたる古詩の二句を節録したるなり。木香の枝葉横さまに長く伸びて庭前を散歩する婦人の袖や裾に引つかゝるさまを詠じたるなり。

横枝斜縮袖  
嫩葉下牽裾



紅白桃花（邊覽の畫に倣ふ、邵康節の詩）

施朱施粉色皆好。傾國傾城艷不同。疑是蕊宮雙姊妹。一時何肯嫁東風。

朱を施し粉を施し色皆好し、國を傾け城を傾け艷同じからず。疑ふらくは是れ蕊宮の雙姊妹、一時に何ぞ肯て東風に嫁する。

解 此は宋の大儒邵康節の二色桃花の詩にて、紅桃白桃の花の艷麗なるさまを詠じたるなり。原詩には、何肯を携手に作り、疑ふらくは是れ蕊宮の雙姊妹、一時に手を携へて東風に嫁するかと、と讀む。勝れりと爲す。朱を施すは紅桃に就いて言ひ、粉を施すは白桃に就いて言ふ。國を傾け城を傾くは、美しくしき女を形容する語。蕊宮は花の宮殿。皮日休の詩に數樹參差是蕊宮の句有り。東風は春の風なり。



施朱施粉色皆好傾國傾城  
艷不同疑是蕊宮雙姊妹  
一時何肯嫁東風



綠牡丹（趙昌の畫に倣ふ、徐文長の句）  
漢水鴨頭軟非色。隴山鸚鵡未呼人。

漢水の鴨頭、色に非ざらしむ。隴山の鸚鵡未だ人を呼ばず。解、これは綠牡丹の花の色（あふとろ）の美しくしきを誅じたる也。漢水の鴨頭の頭に似たる美しくしき水の色も、隴山に産する鸚鵡の羽毛の色も、此花の色（あふとろ）の美しくしきに比較するに足らずとの意。未だ人を呼ばずとは、人を呼んで己の羽毛の美しくしきを誇らざるをいふ。

漢水鴨頭  
教此色  
隴山鸚鵡  
未呼人



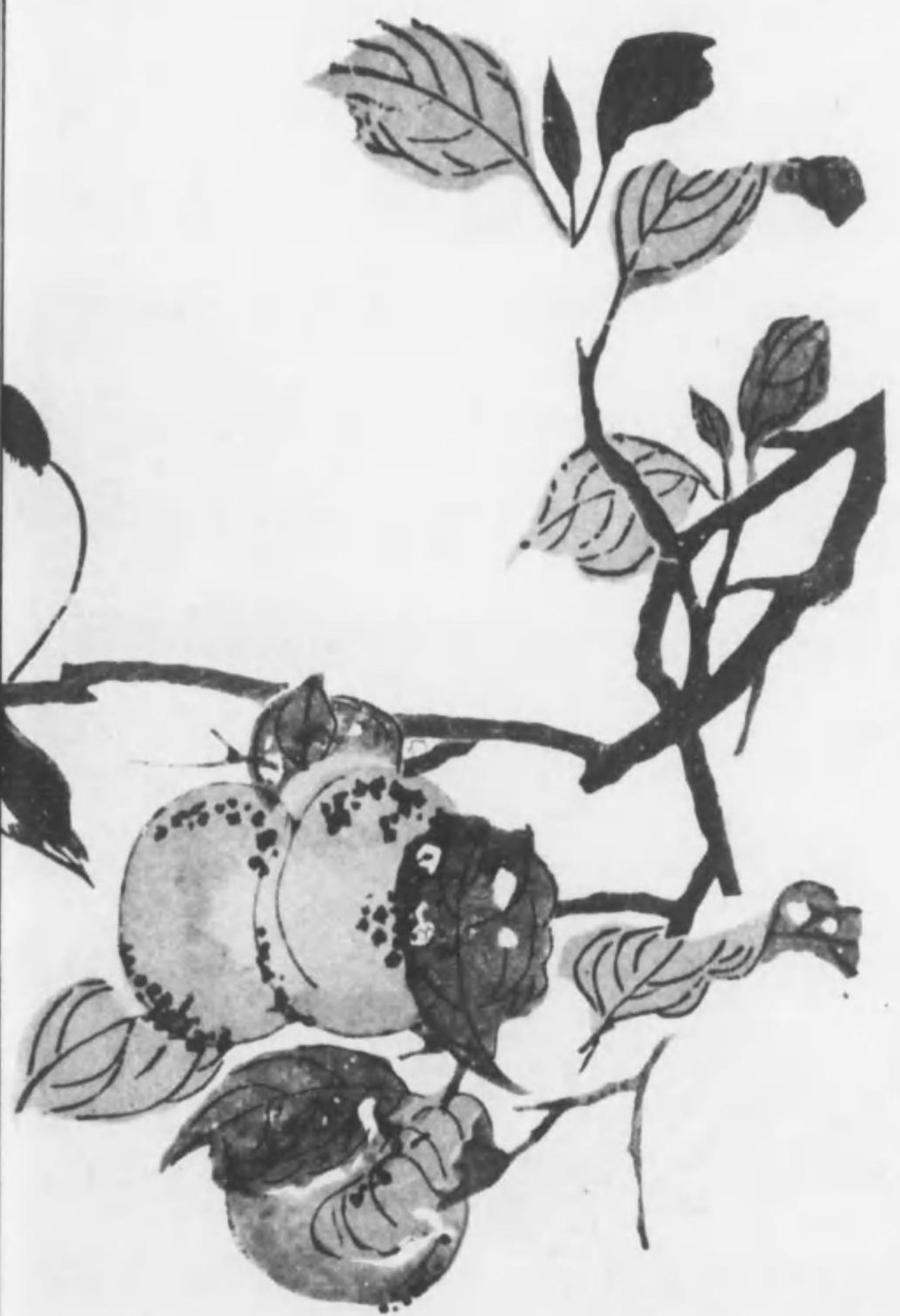
杏子 (林良の畫に倣ふ、  
物産の句)

上苑繁英鮮錦豔。董林香  
實淡霞紅。

上苑の繁英は鮮錦のごとく豔  
に、董林の香實は淡霞のご  
とく紅なり。

解 第一句は杏の花の豔麗  
なるを言ひ、第二句は實の  
色の紅にして美しくしきを言  
ふ。上苑は天下の御苑即ち  
上林苑なり。西京雜記に曰  
く、上林苑に文杏有り。文  
彩有るを謂ふなりと。又曰  
く、上林苑に蓬萊杏有り。鮮  
繁英は、しげりたる花。鮮  
豔は新らしく美しくしき也。

董林は董奉の園林。神仙傳  
に曰く、董奉、(董)山に居  
りて病を治む。重き者は杏  
五株を種ましめ、輕き者は  
一株。林中に於て所在に菓  
食一器を作り、一器の杏毎  
に一器の穀に換ふ。少き者  
は虎これを通ふ。乃ち穀を  
以て豹を驅はす。董仙の杏  
林と號すと。香實は香味あ  
る果實。淡霞は朝やけ、夕  
やけ。



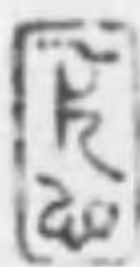
上苑繁英鮮錦豔  
董林香實淡霞紅



秋池翠鳥（李迪の畫に倣ふ、梅聖俞の句）  
 枝低棲水鳥。葉弱抱秋蟬。  
 枝低くして水鳥棲み、葉弱くして秋蟬抱く。  
 翠鳥は、かはせみ。埤雅に曰く、翠鳥は或は之を翳翠と謂ふ。雄にして赤きを翳と曰ひ、雌にして青きを翠と曰ふと。



枝低棲水鳥  
 葉弱抱秋蟬



金絲桃（林梅の畫に倣ふ、  
王可直の題）

黃桃學金母。絳翅比紅兒。

黃桃、金母を學び、絳翅、紅  
兒に比す。

解 金絲桃は未央梅なり。

第一句は花の黃色なるを言  
ひ、第二句は上に飛べる赤  
とんぼの紅色なるをいふ。  
黃桃は黃色なる桃の意にて  
即ち金絲桃をいふ。金母は  
道家、金を鼎に入れ、以て  
眞丹を煉る、其金を金母と  
謂ふ。即ち黃金なり。絳翅  
は赤き翅、即ち上に飛びた  
るとんぼの翅をいふ。紅兒  
は煉られたる眞丹を謂ふな  
るべし。赤とんぼを紅兒と  
曰へども、今の意はそれに  
非ず。

黃桃學金母  
絳翅比紅兒





紅葉 (殷宏の畫に倣ふ、沈雪江の題)

鶉鴒飽街鳥相子。愛他霜葉色如花。

鶉鴒飽くまで街む鳥相子、愛す他の霜葉の色の花の如きを解 鶉鴒は、ははつてう。鳥相子は、なんきんはぜ、たうはぜの實。他は鳥相をさす。



鶉鴒飽街鳥  
柳子愛他霜  
葉色如花

垂枝海棠 (維廣の畫に倣ふ、都谷の律句を載る)

春風用意勻顔色、銷得携船與賦詩。朝醉微吟看不足。羨它蝴蝶宿深枝。

春風、意を用ひて顔色を勻しうす、銷し得たり。船を携ふると詩を賦するとを。朝醉微吟、看れども足らず、羨む它的の蝴蝶が深枝に宿するを。

解、これは、前の西府海棠の條に註せしが如く、都谷の海棠の律詩の第一第二第七第八の四句を節録せしなり。微吟は原詩には暮吟に作る。勝れりと爲す。顔色を勻しうすとは、色のむら無きやうにすること。

春風用意勻顔  
色銷得携船与  
賦詩朝醉暮吟  
看不足羨它蝴  
蝶宿深枝



杏燕（崔白の畫に倣ふ、  
鄭谷の句）

小桃新謝後。雙燕欲來時。

小桃新に謝して後、雙燕來らんと欲する時。

解 此二句は杏の花咲く季節を言ふなり。謝すとは花の散るをいふ。これは鄭谷が杏花を咏する律詩の第三第四の二句を節録したるなり。其全詩に曰く、不學梅欺雪。輕紅照碧池。小桃新謝後。雙燕却來時。香闌登麗客。煙籠宿蝶枝。臨軒須覩取。風雨易離披。



小桃新  
謝後  
雙燕欲來  
時



凌霄花（戴碗の畫に倣ふ、梅聖俞の句）

仰見蒼蚪枝。上發形霞蕊。

仰ぎて見る蒼蚪の枝、上に發く形霞の蕊。

解 凌霄花は、のうぜんかづら。第一句は凌霄花の蔓に就いて言ひ、第二句は其花に就いて言ふ。蒼蚪は深青色の龍。枝を形容するなり。形霞は赤き色のかすみ。花の色を形容するなり。蕊は花の意として用ふ。此二句は梅聖俞の五言古詩の第七第八の二句を節録せるなり。宋の戴碗は、京師の人、政宣の間、翰林に在り、恩寵特に異なり。閑に入りて供奉す。翎毛花竹に工なり。徽宗、其臂を封じて、私に畫かしめず。故に世に傳はる者鮮し。



仰見蒼蚪枝  
上發形霞蕊

戴碗

石榴 (夏侯詒詒の畫に倣ふ、潘尼の賦の句)

花實並麗。滋味亦殊。朱房赫奕。紅萼參差。

花實並麗。滋味亦殊。朱房赫奕。紅萼參差。花實並麗。滋味亦殊。朱房赫奕。紅萼參差。

解 第一句は石榴の花も實も共に麗はしきを言ひ、第二句は實の美味なることを言ひ、第三句は實の美しくしきことを言ひ、第四句は花の美しくしきことを言ふ。赫奕は光りかがやくさま。朱房は實とも花とも解し得べきも、潘尼の安石榴賦には、朱房を朱芳に作る。然るときは明かに花を言ふなり。參差は或は高く或は低く不揃なるさま。但し原文にては、此四句は連讀したるべきならず、二句づつ離れて居るなり。朱房も原文によれば花と解する方が宜しなり。宋の夏侯詒詒は、字は景休、蜀の人、孟昶に事へて待詔と爲り、随つて宋に入り、圖畫院畫學を得たり。黄筌の翎毛花竹を師とし、流輩に推重せらる。

花實並麗  
滋味亦殊  
朱房赫奕  
紅萼參差



玉蘭（徐崇矩の畫に倣ふ。白樂天の詩）

紫房日照臘脂拆。素艶風吹膩粉開。悟得獨飽脂粉態。木蘭曾作女郎來。

紫房日照として臘脂拆き、素艶風吹きて膩粉開く。悟り得たり獨り脂粉の飽態を、木蘭曾て女郎と作り來れり。

解 玉蘭は白もくれん。此詩は白樂天の戲題「木蘭花」の詩にして、必ずしも白もくれんを詠じたるに非ず、第一句は紫もくれんを言ひ第二句は白もくれんを言ふなり。悟の字、原詩には怪に作る。飽は原本には誤つて飽に作る。紫色の花房が日に照らされて臘脂をつけたる美人の如き花が開き、素く艶美なる花が風に吹かれて膩粉とつけたる美人の如し。かく此花に脂粉の意多きを怪しみしが、今其故を悟れり。木蘭は曾て女郎と爲りしなり、との意。女郎とは女子にして男子の才有る者をいふ。古、木蘭といふ女子有り、男子の装を爲して父に代りて征伐に従ひ、十二年にして歸る。人其の女子たるを知る者無かりき。樂の樂府に木蘭の辭あり。

紫房日照  
臘脂拆素  
艶風吹膩  
粉開悟得  
獨飽脂粉  
態木蘭曾  
作女郎來



薔薇 (文宣の畫に倣ふ、  
陳石亭の句)

密刺防織手。嬌英妬冶容。  
密刺、織手を防ぎ、嬌英、冶容を妬む。  
解 薔薇に刺あるを詠じた  
るなり。密刺は刺の多きを  
いふ。織手は美人の細くし  
なやかなる手をいふ。嬌英  
は美麗なる花、薔薇の花を  
いふ。冶容は美人のなまめ  
かしきすがた。



密刺防織手  
嬌英妬冶容  
陳石亭

雪梅 (徐熙の畫に倣ふ、  
杜少陵の句)

風運幽香出。禽窺素艶來。  
風は幽香を運りて出で、禽は  
素艶を窺ひて來る。  
解 幽香は、かすかなるか  
をり。素艶は白き花。

風運幽香出禽  
窺素艶來

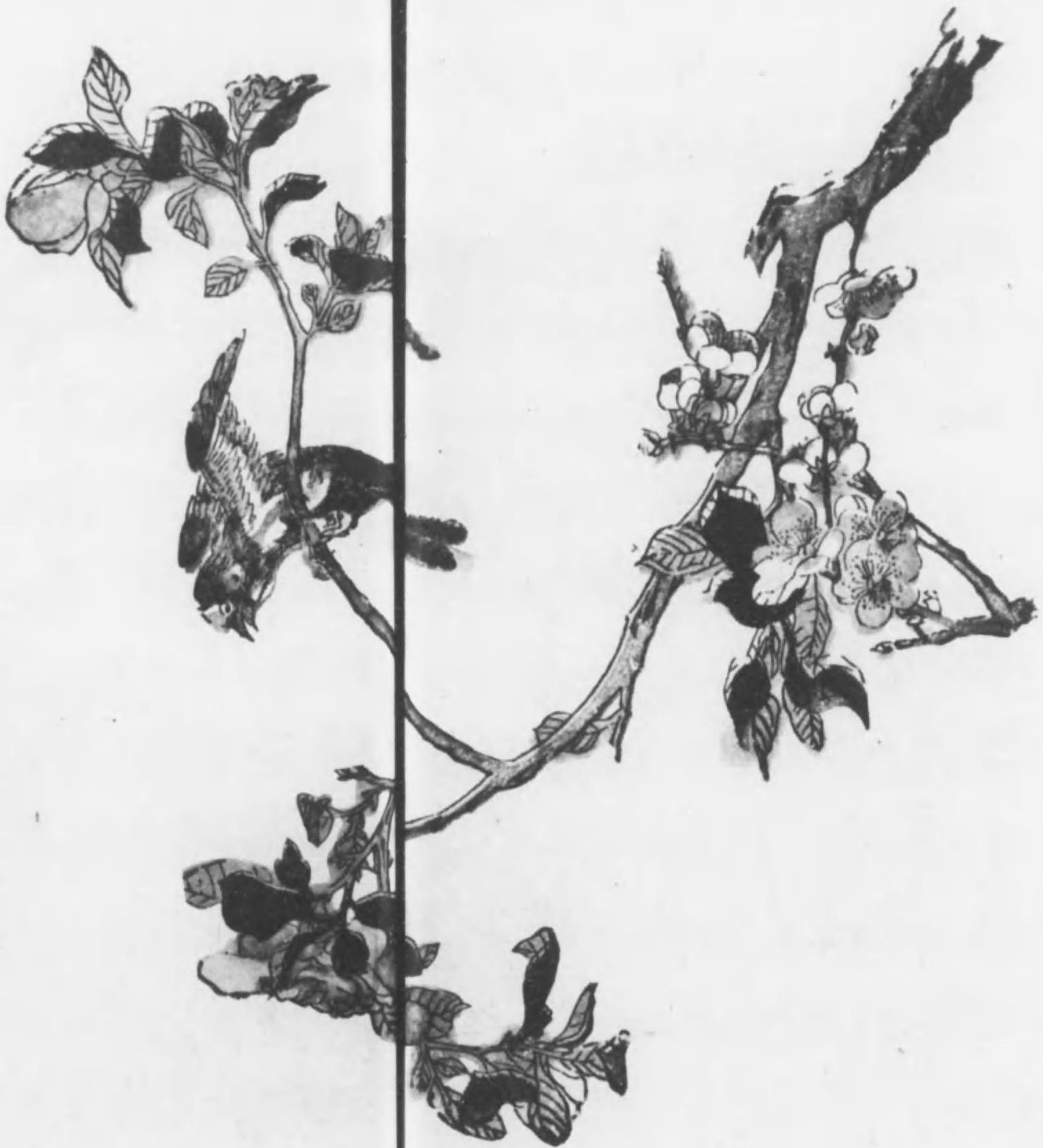




茶梅（黃居采の畫に倣ふ、沈因伯の題）

紅艶霞烘色。清芬雪染花。幽禽棲宿好。餐雪復餐霞。

紅、霞、色を烘り、清芬、雪、花を染む。幽禽棲宿して好し、雪を餐し復た霞を餐す。解 茶梅は、さざんくわ。然れどもここにては茶花（さざんくわ）と梅花と二つに見ることを得可し。第一句はさざんくわを言ひ、第二句は梅を言へばなり。さざんくわの紅にして艶なるは、霞にあぶりかわかされたるが如く、梅の花の白くして清きは、雪に染められたるなるべしと言ふなり。



紅艶霞烘色清芬  
雪染蒼幽禽棲宿  
好餐雪復餐霞

因伯

蘆雁（趙宗漢の畫に倣ふ、王孫毅の題）

魚蝦聚處吞清影。鴻雁來時對白頭。

魚蝦聚まる處、清影を吞み、鴻雁來る時、白頭に對す。解 清影とは何をさすか、これだけの句にては的確に知るを得ざれども、第一句は、天晴れわたりたる日に魚や蝦などが水中に群がり遊びて樂しめる趣を言ふなるべし。白頭は、蘆花の白きを形容するなり。

魚蝦聚處  
吞清影  
鴻雁來時  
對白頭



丹桂（劉永年の畫に倣ふ、  
李巨山の詩）

枝生無限月。香滿自然秋。

枝には生ず無限の月、香は滿  
つ自然の秋。

解 丹桂は金もくせい。古  
の傳説に、月の中に桂樹有  
り、中秋の頃、花盛に開く、  
故に中秋の月最も光輝あり  
と云ふ。今、此傳説により  
て、丹桂の花の無數に咲き  
たるを、枝生無限月と曰ふ  
なり。香滿自然秋は、其芳  
香の馥郁として遠きに及ぶ  
を言ふなり。



枝生之  
限月  
香滿自  
然秋



魏紫姚黃 (易元吉の畫に倣ふ、劉貢父の句)

洛陽牡丹名品多。綠紫淺黃如舞娥。

洛陽の牡丹、名品多し、綠紫淺黃、舞娥の如し。

解 魏紫は、むらさきばたん。姚黃は黃ばたん。綠は濃き赤色。淺黃は淡き黄色。舞娥の如しとは、美人の舞ふが如きなり。此二句は梅聖俞の牡丹の詩の句なり。ここに劉貢父とあるは誤なり。



洛陽牡丹名品多  
綠紫淺黃如舞娥



### 畫傳三集卷末

#### 設色諸法

畫傳初集山水中已載設色諸法于卷首矣。茲後編之譜花卉蟲鳥也。尤當以著色爲先。今附卷末者何也。從前諸譜各首述源流。次法訣。次分式。次全圖。茲總以設色終焉。爲諸譜中初學旨歸。有如書所謂若作梓材。既勤樸斲。惟其塗丹牒。因粗治以及細削。然後飾以丹朱采色。亦若逸詩之巧笑美目。具此倩盼之姿。而後加以華采之飾。昔因詩而喻以繪事之有後先。今因繪事而引詩書。以見層次。門庭堂奧。瞭如指掌矣。

【譯】畫傳初集の山水の中に、已に設色の諸法を卷首に載せたり。茲に後編の、花卉蟲鳥を譜するや、尤も當に著色を以て先と爲すべし。今、卷末に附するは何ぞや。從前の諸譜は、各々首に源流を述べ、次に法訣、次に分式、次に全圖、茲に總ぶるに設色を以てして終り、諸譜の中の初學の旨歸と爲す。書の謂はゆる、梓材を作るが若く、既に勤めて樸斲し、惟れ其れ丹牒を塗るが如き有り。粗治に因りて以て細削に及び、然る後に飾るに丹朱の采色を以てす。亦、逸詩の巧笑美目、此倩盼の姿を具へて、而して後に加ふるに華采の飾

を以てするが若し。昔は詩に因りて繪事に後先有るを以てし、今は繪事に因りて詩書を引きて、以て層次を見はす。門庭堂奥、瞭として掌を指すが如し。

【註】旨歸、旨趣歸趨なり。進んで至るべき方向。○若作梓材、既動樸斲、惟其塗丹艱、書經の梓材篇の語。梓は木の名、あづさ。良材にして器を作るべし、樸は底本には誤つて撰に作る。樸斲は、あらけづり。艱は赤石脂の類、顔料と爲して以て宮室の飾と爲すべき者なり。たとへば梓の良材を以て器物を作るには、先づ勤めて荒けづりを爲し、それを終りて然る後に丹艱などを塗りて裝飾を施すが如しとの意。○粗治、あらごなしすること。○細削、仕上げをすること。○逸詩之巧笑美目、具此倩盼之姿、而後加以華采之飾、この數句は、論語八佾篇に、子夏問うて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を爲すとは、何の謂ぞや。子曰く、繪事は素より後にす。とあるに本づく。朱子の註に、此れ逸詩なり。倩は口輔好きなり。盼は目の黑白分るなり。素は粉地、畫の質なり。絢は采色、畫の飾なり。言ふところは、人、此倩盼の美質有りて、而して又加ふるに華采の飾を以てすること、素地有りて采色を加ふるが如きなり。とあり。○層次、漸次に進むべき次第。○門庭堂奥、初學より奥義に至るまでの順序にたとふ。

【解】芥子園畫傳の初集の山水の中には、已に設色の諸法を卷首に載せた。茲に後編に花卉蟲鳥を譜するに就いては、尤も著色法を先に説くべきであるのに、今、卷末に附載したのは、何故であるか。これまでの蘭竹梅菊花卉蟲鳥の諸譜は、各々首

にそれ等の畫法の沿革を述べ、次に畫法と歌訣を述べ、次に部分部分を畫く法式を載せ、次に全圖を載せたのであり、こゝに最後に設色法を説いて之を總べ、諸譜の中の初學者の歸向する所を示したのである。書經の中に、梓材を作るに、既に勤めて樸斲し、惟れ其れ丹艱を塗るが若し、と謂つてあるのと似て居るところが有る。初めに荒ごなしをして、それから仕上げをし、そして後に丹や朱の彩色を施すのである。亦、詩經に漏れて居る詩に、巧笑倩たり、美目盼たりと云つてあるが、此の倩として愛らしき口元、盼として美しくしき目つきを具へて居て、然る後に華采を施して飾るやうなものである。昔は詩に因つて繪畫には先にすべきことと後にすべきことが有ることを喻へたのであるが、今は繪畫に因つて詩經書經を引用して順序次第の有ることを見すのである。斯くて初學より奥義に至るまでの順序が、掌を指すが如く明瞭になるのである。

石 青

石青須擇梅花片者。敲碎入乳鉢細研。用水漂成三號曬乾。最上輕清色淡者。

用染正面綠葉。方得深厚之色。其中爲質粗細得宜。爲色深淺正當者。用著純青花瓣。及鳥之頭背。最下質重而色深者。用著鳥之翅尾。及靛綠葉後。凡著鳥身花瓣。青淺者。以靛青分染。深者。以胭脂分染。

【譯】石青は須く梅花片なる者を選び、敲碎して乳鉢に入れて細研し、水を用ひて漂して三號と成して曬し乾かすべし。最も上なる輕清にして色淡き者は、用ひて正面の綠葉を染め、方に深厚の色を得。其中の、質たる粗細宜しきを得、色たる深淺正當なる者は、用ひて純青なる花瓣及び鳥の頭背に著く。最も下なる質重くして色深き者は、用ひて鳥の翅尾に著け、及び深緑なる葉の後に靛す。凡そ鳥身・花瓣に著くるに、青淺き者は、靛青を以て分染し、深き者は、胭脂を以て分染す。

【註】第一冊設色各法の中の石青(七四頁)を参照せよ。○敲碎、たたいてくだく。○細研、細かく研り砕く。○用水漂。水飛すること。○分染、わりくま。

【解】石青は、梅花片と稱する者を選んで、敲き碎いて乳鉢の中に入れて研つて細かく砕き、水飛して三種に分けて曬し乾かすべきである。其の一番上の軽くあつさりとして色の淡い者は、正面の綠葉を染めるに用ひると、深厚なる色を得られる。其の中の、性質の粗細宜しきを得、色の濃淡程善き者は、純青なる花瓣及び鳥の頭や背を染めるに用ひる。一番下の質重くして色濃き者は、鳥の翅や尾を染めるに用ひ、及び深

緑なる葉の裏ぬりするに用ひる。凡そ鳥の身や花瓣に用ひる、青の浅い者は靛青を以て分染し、青の濃い者は、胭脂を以て分染する。

石 綠

石綠研漂法同石青。亦分三種。其上色深者。只宜靛濃厚綠葉。及綠草地坡。其中色稍淡者。宜靛草花綠葉。或著正面。宜以草綠。或著翠鳥。用草綠絲染。其下色最淡者。宜著反葉。凡正面用石綠。俱以草綠勾染。深者。草綠宜帶青。淺者。草綠宜帶黃。

凡用石青石綠。將乾者。用廣膠水研開。膠不可多。多則黏滯不任筆。不可少。少則稀淡易脫。須審度用之。如絹上正面用草綠。只宜背面靛。石綠。若于扇頭紙上。用濃重之色。不能反靛。則用于正面。再加草綠染。方覺厚潤。未可一次濃堆。不妨數層漸加。則色勻而無痕跡。用後必將滾水漂出膠。次日再加色方鮮明。

【譯】石綠の研漂は、法、石青に同じく、亦、三種に分つ。其上の色深き者は、只だ宜しく濃厚なる綠葉及び

緑草の地坡に襯すべし。其中の色稍や淡き者は、宜しく草花の緑葉に襯すべし。或は正面に著け、罨するに草緑を以てし、或は翠鳥に著け、草緑を用ひて絲染す。其下の色最も淡き者は、宜しく反葉に著くべし。凡そ正面に石緑を用ふれば、俱に草緑を以て勾染す。深き者は、草緑宜しく青を帯ぶべし。淺き者は、草緑宜しく黄を帯ぶべし。

凡そ石青・石緑を用ふるに、將に乾かんとする者は、廣膠水を用ひて研開す。膠は多くす可からず。多ければ則ち黏滯して筆に任せず。少くす可からず。少ければ則ち稀淡にして脱し易し。須く度を審かにして之を用ふべし。如し絹上の正面に草緑を用ふれば、只だ宜しく背面に石緑を襯すべし。若し扇頭紙上に于て、濃重の色を用ひ、反襯する能はざれば、則ち正面に用ひ、再び草緑を加へて染罨すれば、方に厚潤なるを覺ゆ。未だ一次に濃堆す可からず。數層に漸く加ふるを妨げず。則ち色勻しくして痕跡無し。用ひて後は必ず滾水を以て漂して膠を出す。次日再び加ふれば、色方に鮮明なり。

【註】 第一冊七十頁を参照せよ。○研漂、研りて細かにし、水飛すること。○絲染、絲の如く細く染めること、即ち毛描きなり。○勾染、くくりくまどり。○廣膠水、にかはの水。○黏滯、ねばり、とどこほる。○濃堆、濃くつける。○勻、むら無きこと。○滾水、熱湯。

【解】 石緑を研つて細かくして水に漂すことは、其法は石青に同じくして、これも三種に分ける。其上の色の濃い者は、只だ濃厚なる緑葉と緑草の地坡とに裏から塗るに

用ひる。(ここに上とあるは恐らくは下の誤であらう。)其中の色の稍や淡い者は、草花の緑葉に裏から塗るに用ひる。或は絹の正面に著けて、草緑をかけ、或は翠鳥に著けて、草緑を用ひて毛描きをする。其下の色の最も淡い者は、反葉に著けるに用ひる。(ここに下とあるは、恐らくは上の誤であらう。)すべて絹の正面に石緑を用ひるときは、草緑を以て勾染する。石緑の色の濃い者は、草緑に青を帯びさせるが宜しい。淡い者は、草緑に黄を帯びさせるが宜しい。

すべて石青や石緑を用ひるに、乾燥しようとするときは、膠の水を用ひて研り開くのである。膠は多く用ひてはならぬ。膠が多いときは、黏滯つて筆を自由に動かすことが出来ない。餘りに少くしてはならぬ。餘りに少いときは、稀淡くて脱げ易い。其度合を審かにして膠を用ひることを要する。若し絹の正面に草緑を用ひるときは背面に石緑を塗るが宜しい。若し扇や紙の上に、濃く重い色を用ひて、裏塗りすることが出来ないときは、正面に濃く重い色を用ひ、更に草緑を其上にかけて著色すれば、始めて厚潤なる趣が出る。一回で濃く塗つてはならぬ。幾回も塗つてだんだんに濃くして行くが宜しい。さうすると、色にむらが無くて痕跡を留めないやう



になる。使用した後は、必ず熱湯を以て漂して膠を出してしまふ。次の日に用ひるときに再び膠を加へると、色が鮮明になるのである。

硃 砂

入畫之大紅、必須硃砂。方不變色。以銀硃色久則變也。細研、少加輕膠水。澄去下面重脚。漂去上面浮黃。將中間鮮明者、曬乾、加膠、用著山茶石榴大紅花朵、瓣以胭脂分染。在下沈重、只可反襯。

【譯】 畫に入るの大紅は、必ず硃砂を須ひ、方に色を變ぜず。銀硃の色は久しければ則ち變ずるを以てなり。細研し、少しく輕膠水を加へて、下面の重脚を澄去し、上面の浮黃を漂去し、中間の鮮明なる者を將て曬し乾かして膠を加ふ。用ひて山茶・石榴・大紅なる花朵に著け、瓣は胭脂を以て分染す。下に在りて沈重なるは、只だ反襯す可し。

【註】 第一册八〇頁を参照せよ。○重脚、あり。○浮黃、上すみの黄色なる者。

【解】 畫に用ひる大紅色には、必ず硃砂を用ひる。さうすれば色が變らない。銀硃の色は久しいうちに變色するから、用ひないのである。細かく研つて、淡い膠水を少し入れて、下の方に沈んで居る重脚を澄まし去り、上の方に浮んで居る黄色なる者を漂し去り、中程の色の鮮明なる者を曬し乾かし、膠を加へて用ひる。これを用ひて山茶・石榴などの大紅色なる花に着色する。瓣は胭脂を用ひて分染する。下に沈んで居る重い者は、只だ裏塗りに用ひることが出来るだけである。

銀 硃

如硃砂不佳、反不如銀硃鮮明。則以銀硃代之。須用標銖。細研、漂澄其浮面沈脚。取中間者、加膠用之。

【譯】 如し硃砂、佳ならず、反つて銀硃の鮮明なるに如かざれば、則ち銀硃を以て之に代ふ。須く標銖を用ひ、細研し、其浮面と沈脚とを漂澄し、中間なる者を取り、膠を加へて之を用ふべし。

【註】 第一册八一頁を参照せよ。○標銖、水飛して精選したる朱。

【解】 若し硃砂が佳品にあらずして、反つて銀朱の鮮明なるに及ばないときは、銀銖を以て代用する。それには必ず標銖（うはずみの精良なる朱）を用ふべきであり、細かに研り碎いて、その表面に浮んで居る者と底に沈澱して居る者を水飛して除き去

り、其中間の者を取り、膠を加へてそれを用ふべきである。

泥 金

將眞金箔以指略黏膠水。醮金箔逐張入碟内乾研膠水不可多。多則水浮金沈不受指研矣。俟研細金箔如泥黏于碟内始加滾水研稀。漂出膠水。微火熾乾。再加輕膠水用之。泥金只宜于硃砂石青上。方發光彩。用之鈎染鸞鳳錦雞之毛羽。愈顯丹翠輝煌。亦有染果色及鈎正面著青綠之葉筋者。用後亦宜出膠如青綠法。

【譯】眞金箔を將て、指を以て略しく膠水を黏し、金箔を醮して逐張し、碟内に入れて乾研す。膠水は多くす可からず。多ければ則ち水浮び金沈み、指研を受けず。金箔を研細して泥の如くにして碟内に黏するを俟ちて、始めて膠水を加へて研稀し、膠水を漂出し、微火にて熾乾す。再び輕膠水を加へて之を用ふ。泥金は只だ硃砂石青の上に宜しく、方に光彩を發す。之を用ひて鸞鳳錦雞の毛羽を鈎染すれば、愈々丹翠の輝煌を顯はす。亦用ひて果色を染め、及び正面の青綠を著くるの葉筋を鈎する者有り。用ひて後、亦、宜しく口を出すこと青綠の法の如くすべし。

【註】第一冊八五頁を參照もよ。○逐張、すりまはすこと。○乾研、かわかし、する。○研稀、すつて薄める。

○熾乾、あぶつてかわかす。○青綠、石青と石綠。

【解】眞金箔を碟の内に入れ、指を以て少し膠水を附けて、金箔を醮してすりまはし、碟の内て研り乾かす。膠水は多くしてはならぬ。多いときは水は浮び金は沈んで、指で研ることが出来ない。金箔を研つて極細かくして泥のやうになつて碟の内にはりつくのを待つ。それから熱湯を入れて研つて薄くし、膠水をこぼし捨てて、うす火で温めて乾かす。使用する時に臨んで、更に輕い膠水を加へて之を使用するのである。泥金は只だ硃砂や石青の上に用ひるに宜しく、さうするに光彩を發する。泥金を用ひて鸞鳳錦雞の毛羽を鈎染すると、一層丹翠の色彩が輝煌くやうになる。亦、果の色を染めたり、青綠を着色したる正面の葉の筋を書き入れるに用ひる者も有る。使用した後は、亦、膠を漂し去ること石青・石綠の法の如くすべきである。

雄 黄

選明淨者細研漂如青綠法。加膠水用著花中金黃之色。但其色日久或變。竟有只用藤黃以硃砂浮標○之即成金黃色矣。

【譯】 明淨なる者を選びて、細研し漂すること、青緑の法の如く、膠水を加ふ。用ひて花中の金黃の色を著く。但し其色は日久しくして或は變ず。竟に、只だ藤黃を用ひ、硃砂の浮標を以て之を冑する有り、即ち金黃色を成す。

【註】 第一冊八三頁を參照せよ。○浮標、うはずみ。

【解】 雄黃は、透き通るやうな清淨なる者を選んで、それを細かく研つて水飛することとは、石青・石緑の法の如くする。使用する時に臨んで膠水を加へる。花の中の金黃の色を著けるに用ひる。但し雄黃の色は久しくなると變色することが有る。故に只だ藤黃を用ひ、其上に硃砂の浮標を冑することがある。さうするに金黃色になる。

### 傳粉

用杭州回鉛定粉。搗細。再入膠細研。以水洗入碟內。少定片時。另過一碟。將下面沈重者不用。置微火上。俟面上浮起墨皮。此乃鉛性未盡。以紙拖去。再起再拖。黑盡乃止。加輕膠水和研。微火熾乾。畫時滾水洗用。或著白花。或合衆色。凡絹上正面用粉。後面必襯。○又蒸粉去鉛法。將老豆腐一塊。中挖空。安成塊鉛粉。入鍋內蒸之。蒸後取粉研用。則鉛之黑氣。豆腐內收盡矣。

著粉法。正面著粉。宜輕宜淡。要與墨匡相合。不可出入。如一層未勻。再加一層。故宜輕便。于再加。若先已重傳。再加則掩去墨匡。無從分染。且不可太重。太重。則有日久鉛性變黑者矣。

染粉法。如牡丹荷花。雖經傳粉。必再以粉染其瓣尖。方有淺深層次。諸花之瓣。如求嬌艷。亦必先于粉上加染。

絲粉法。花如芙蓉秋葵。瓣上有筋。須鈎粉色染。菊花每瓣亦有長筋。以粉絲出。并鈎墨匡。再加色染。衆花心鬚。從中先圈一圓圈。由圈四圍。絲出粉鬚。鬚上點黃。

點粉法。寫生花。不用鈎匡。只以粉醮色。濃淡點之。宜意在筆先。與鈎勒花不同。其枝葉。俱宜用色筆畫成。名爲無骨畫。是也。若點花蕊之粉。須合藤黃。不可過深。入膠宜輕。點出黃蕊。方外高內凹。不晦暗也。

襯粉法。絹上各粉色花後。必襯濃粉。方顯。若正面乃各種淡色。背後只襯白粉。若係濃色。尙覺未顯。則仍以色粉襯之。若背葉。正面色用淺綠。背面只可

粉線觀不可用石綠

【譯】 杭州の回鉛定粉を用ひて搗細し、再び膠を入れて細研し、水を以て洗ひて碟内に入れ、少しく定まること片時、別に一碟に過し、下面の沈重なる者をば用ひず、微火の上に置き、面上に墨皮を浮起するを俟つ。此れ乃ち鉛性未だ盡きざるなり。紙を以て拖き去る。再び起れば再び拖く。黒盡きて乃ち止む。輕膠水を加へて和研し、微火にして燥乾す。晝く時、滾水にて洗ひて用ふ。或は白花に著け、或は衆色に合はす。凡そ絹上の正面に粉を用ふれば、後面に必ず襯す。○又、粉を蒸して鉛を去る法。老豆腐一塊を將て中を挖空し、塊を成せる鉛粉を安き、鍋内に入れて之を蒸す。蒸して後、粉を取りて研りて用ふ。則ち鉛の黒氣、豆腐の内に收まりて盡く。

著粉法。正面に粉を著くるには、宜しく軽くすべく宜しく淡くすべく、墨匡と相合はんことを要す。出入す可からず。如し一層にして未だ勻しからざれば、再び一層を加ふ。故に宜しく軽くして再び加ふるに便にすべし。若し先に已に重く傳けんには、再び加ふれば則ち墨匡を掩ひ去り、分染するに従無し。且つ太だ重くす可からず。太だ重ねれば、則ち日久しくして鉛の性、黒に變ずる者有り。

染粉法。牡丹・荷花の如きは、傳粉を経たりと雖も、必ず再び粉を以て其瓣尖を染して、方に淺深の層次有り。諸花の瓣、若し嬌艶を求めば、亦必ず先づ粉上に于て染を加ふ。

絲粉法。花、芙蓉・秋葵の如く、瓣上に筋有るは、須く粉を鈎して色染すべし。菊花は瓣毎に亦長き筋有り、粉を以て絲出し、并せて墨匡を鈎し、再び色染を加ふ。衆花の心脈は、中より先づ一圓圈を圍し、圈の四圍

より、粉鬚を絲出し、鬚上に黄を點す。

點粉法。花を寫生するに、鈎匡を用ひず、只だ粉を以て色を醗し、濃淡これを點す。宜しく意、筆の先に在るべく、鈎勒の花と同じからず。其枝葉は、俱に宜しく色筆を用ひて畫き成すべし。名づけて無骨畫と爲す、是れなり。若し花蕊の粉を點するには、須く藤黄を合はすべし。深きに過ぐ可からず。膠を入るるには宜しく軽くすべし。黄蕊を點出するに、方に外高く内凹みて、晦暗ならざるなり。

襯粉法。絹上の各粉色の花の後には、必ず濃粉を襯して方に顯かなり。若し正面乃ち各種の淡色なれば、背後に只だ白粉を襯す。若し濃色に係り、尙ほ未だ顯かならざるを覺えば、則ち仍つて色粉を以て之を襯す。若し背葉は、正面の色に淺緑を用ふれば、背面は只だ粉線をもて襯す可し。石緑を用ふ可からず。

【註】 第一冊八七頁を参照せよ。○搗細、研つて細かくする。○少定片時、暫時そつとして置いて落ちつかせること。○中挖空、中に穴をあけること。○著粉法、胡粉を著ける法。○墨匡、墨にて書きたる輪郭。○且不可太重。不可太重の四字は無きを可とす。○染粉法、一度胡粉を著けたる上に更に胡粉を加へてくまどる法。○絲粉法、胡粉を以て芙蓉や秋葵などの花の筋を書き入れる法。○絲出、筋を引くこと。○點粉法、胡粉を浸したる筆の先に他の繪具を附けて線を用ひずして描く法。○襯粉法、絹の裏に胡粉を引く法なり。

【解】 杭州の回鉛定粉といふ鉛粉を搗つて細かくし、それから膠水を入れて細かく研り、水で洗つて碟の内に入れ、暫くそつと置いて置いて落ちてつかせて、それを別の碟

の中へうつし入れる。下に沈んで居る者は用ひない。別の碟の中へうつし入れた者を微火の上に置いて、表面に黒い皮が浮き出して来るのを待つ。黒い皮が出来るのは、鉛の性がまだ脱け切らない爲めであるから、紙でそれを拖き捨ててしまふ。また黒い皮が出来るご、またそれを拖き捨ててしまふ。黒い皮が出来ないやうになつたら止める。それに軽い膠水を加へて、十分に研り混ぜて、微火で熾つて乾かして置く。畫く時には、熱湯で一旦洗つて用ひるのである。或は白い花に著色するに用ひ、或は他の色に合はせて用ひる。すべて絹の正面に胡粉を用ひるときは、必ず後面からも胡粉を塗るのである。○又、胡粉を蒸して鉛を除き去る法がある。それは、古い豆腐の一塊の中に穴をあけて、その穴の中に、塊になつて居る鉛粉を入れて、それを鍋の中に入れて蒸す。蒸した後に、鉛粉を取り出して細かく研つて用ひるのである。さうすること鉛の黒い氣が豆腐の中に吸ひ込まれて無くなつてしまふ。

著粉法。正面に胡粉を著けるには、軽くするが宜しい、淡くするが宜しい。そして墨で書いた輪郭と相合ふやうにすることを要する。出入してはならぬ。若し一回塗つただけでは未だむらが無いやうになつて居ないときは、更に一回塗るのである。故に初めに軽くしておいて、後に再び塗るのに都合の好いやうにして置くが宜しい。若し初に重く著けたならば、更に塗るときに、墨の輪郭を掩つてしまつて、分染することが出来ない。且つ又、餘りに重くするときは、久しく時日を経過すると、鉛の性が變じて黒色となることが有る。

染粉法。牡丹や荷花の如きは、胡粉を著けた後に、必ず再び胡粉を以て瓣の尖に染する。さうすると始めて淺深の次第があらはれる。その他の諸の花の瓣を描くにも、若し嬌艶なる趣を得んと欲するならば、必ず先づ胡粉の上に染を施すのである。絲粉法。花の中で、芙蓉や秋葵の如く、瓣に筋の有るものは、胡粉で鈎を引いてそれから色を塗るべきである。菊の花には瓣毎に長い筋があるが、これは胡粉を以て線を引き、并せて墨で書いた輪郭の上を胡粉を以て鈎勒して、それから色を塗る。多くの花の心と鬚とは、中に一つの圓い形を書いて、その圓い形の周圍に胡粉を以て細かい鬚を書き、鬚の上に黄即ち葯を加へるのである。

點粉法。花を寫生するに、輪郭を鈎勒せず、只だ胡粉を浸したる筆の先に色を蘸して、或は濃く或は淡くそれを點するのである。意が筆よりも先に在るべきであつて、

鈎勒の花と同じくない。枝や葉はいづれも色の筆を以て畫くべきである。無骨畫(即ち沒骨畫)と稱するものである。花の蕊の胡粉を點ずるには、藤黄を合はせて用ふべきである。藤黄は餘りに濃過ぎてはならぬ。膠を入れるには軽くすべきである。斯くの如くにして黄蕊を點ずるに、外は高く内は凹んで見えて、晦暗くない者が出来るのである。

襯粉法、絹地に胡粉を以て畫いた各種の花の後には、必ず濃い胡粉を塗つて、始めて鮮明になるのである。若し正面が各種の淡い色であるときは、裏には只だ白い胡粉を塗る。若し濃い色で書いた者であるのに、尚ほ鮮明でないならば、色に胡粉を加へた者を以て裏塗りする。若し背葉であつて、絹の正面に淺緑を用ひてあるならば、背面は只だ胡粉に草緑を合はせた者を塗るべきである。石緑を用ひてはならぬ。

調 脂

麤脂須上好雙料者、以滾水浸絞取汁、去滓、曬乾用之。如天陰須用、則火上燉

之。將乾取起不可乾枯也。花之得色、惟脂與粉。粉取潔白、爲花之形質。脂取鮮明、爲花之精神。爭嬌奪艷、似醉如羞、其妖嬈之態、則全在乎脂矣。又如美人雙頰不在深紅、但染色不可過重、須輕輕漸次加染、得宜即止。

【譯】 麤脂は上好の雙料なる者を須ふ。滾水を以て浸し絞りて汁を取り、滓を去り、曬し乾かして之を用ふ。如し天陰るとき用ふべければ、則ち火上に之を燉る。將に乾かんとするときは取り起し、乾枯す可からざるなり。花の色を得るは、惟だ脂と粉とのみ。粉は潔白なるを取り、花の形質と爲す。脂は鮮明なるを取り、花の精神と爲す。嬌を爭ひ艷を奪ひ、醉へるに似、羞づるが如き、其妖嬈の態は、則ち全く脂に在り。又、美人の雙頰の深紅に在らざるが如し。但し染色は重きに過ぐ可からず。須く輕輕に漸次に染を加ふべし。宜しきを得れば即ち止む。

【註】 第一冊八九頁を参照せよ。○妖嬈、うつくしくなまめかしきさま。

【解】 麤脂は、必ず上好の雙料といふ者を用ひる。熱湯を以て浸し、絞つて汁を取り、滓を除き、太陽に曬し乾かして用ひる。若し天氣の陰つて居る時に用ひるならば、火の上で燉つて乾かす。それが乾かうとする時に止め、乾枯びさせてはならぬ。花の色が出るのは、惟だ麤脂と胡粉とのみである。胡粉は潔白なることを取り、花の形質が出る。麤脂は鮮明なることを取り、花の精神が出る。嬌しさを爭ひ艷かさを競ひ、醉

へるが如く、羞みたるが如き、花の妖嬈たるおもむきは、全く臙脂から出るのである。又、美人の頬の色の如く、深紅になつては宜しくない。但し此色を用ひて染めるには、重過ぎてはならぬ。極めて軽くしてだん／＼に重ねて染めるべきである。そして適當なる濃さに達すれば止めるのである。

烟 煤

烟煤惟畫鳥獸人物毛髮用之。將油燈上支碗。虛覆半時。俟其烟頭熏結。掃下入膠研用。膠不可多多。則光亮鈎墨不顯。蟲鳥中如染鸚鵡百舌之翎羽。白鶴之裳。蛺蝶之翅。先濃淡染出。以濃墨絲其細毛。鈎其大翅。則烟煤色暗。墨色光亮悉見矣。

【譯】 烟煤は惟だ鳥獸人物の毛髮を畫くにのみ之を用ふ。油燈の上に碗を支へ、虚覆すること半時、其烟頭の熏結するを俟ち、掃ひ下して膠を入れて研りて用ふ。膠は多くす可からず。多ければ則ち光亮にして、鈎墨顯かならず。蟲鳥の中、鸚鵡・百舌の翎羽、白鶴の裳・蛺蝶の翅の如きは、先づ濃淡染出し、濃墨を以て其細毛を絲し、其大翅を鈎すれば、則ち烟煤の色暗く、墨色光亮にして悉く見はる。

【註】 虚覆、からにてかぶせる。○熏結、くすぶり、むすぶ。○鈎墨、墨にて書きたる筋書き。鈎勒の墨。○絲、細書きすること。

【解】 烟煤は惟だ鳥獸・人物の毛や髪を書くときにのみ用ひる。烟煤を取るには、油燈の上に碗を支へて、半時(今の一時間)ばかり虚覆せて置き、烟が熏ぶりがたまるのを待ち、それを掃き落して膠を入れて研つて用ひる。膠は多くしてはならぬ。膠が多いと光亮があつて、墨の筋書きがはつきりしない。蟲鳥の中で、鸚鵡・百舌の翎羽や、白鶴の裳や蛺蝶の翅の如き類は、先づ烟煤を以て或は濃く或は淡く染めて、それから濃い墨を以て其細い毛を絲し、其大きい羽を鈎勒する。さうすると、烟煤の色は暗くなり、墨の色は光亮があつて悉くはつきり見はれるのである。

靛 花

靛花在青綠金朱中。可謂草色最賤者。然其合成衆綠。加染石青。于青綠金朱中。決不可少。其色必須精妙。較衆色爲難。衆色俱可一日合成。惟靛青必須數日。衆色四季俱宜。惟靛青入膠研漂去滓。宜于夏日。以便烈日曬成。不假火力。

若急用、則以火熬、但勿致枯焦爲妙。畫花卉、人只知脂粉之色爲功、居多。然花與葉各相映帶、若葉色不佳、花容亦減。靛之有俾于綠、綠之有俾于紅、交有賴焉。其製法已詳具畫傳初集中、今不再錄。

【譯】靛花は青綠金朱の中に在りて、草花の最も賤しき者と謂ふ可し。然れども其の衆綠を合成し、石青を加染する、青綠金朱の中に于て、決して少く可からず。其色は必ず須く精妙なるべし。衆色に較べて難しと爲す。衆色は俱に一日に合成す可し。惟だ靛青のみ必ず數日を須ふ。衆色は四季俱に宜し。惟だ靛青のみ、膠を入れ研漂し滓を去ること、夏日に宜しく、以て烈日曬し成すに便し、火力を假らず。若し急に用ふれば、則ち火を以て熬る。但し枯焦を致す勿きを妙と爲す。花卉を畫くには、人只だ脂粉の色の功たること多きに居るを知る。然れども花と葉と各々相映帶す。若し葉色、佳ならざれば、花容も亦減ず。靛の綠に俾有り、綠の紅に俾有る、交々頼る有り。其製法は已に詳かに畫傳初集の中に具す。今、再び錄せず。

【註】第一册九二頁を參照せよ。○草色、草より取りたる繪具。○賤者、廉價なる者。○合成衆綠、雌黃と合はせていろ／＼なる綠色を成すこと、後の章に見ゆ。又、第一册九四頁等にも出づ。○加染石青、靛花を以て石青を分染すること。○脂粉、麝脂と胡粉。○俾、補なり。裨に作るを正しとす。○交有頼焉、相互に助くるをいふ。

【解】靛花は、石青・石綠・泥金・硃砂の中に在つては、草を以て作つた繪具の最も賤しい者と謂ふ可きであるが、いろ／＼な綠色を合成したり、石青を加染したりするのであつて、石青・石綠・泥金・硃砂の中に於て、決して缺くことは出来ない。其色は必ず精妙なることを要する。他の衆々の色に比較して、六かしいのである。他の衆々の色は、いづれも、一日に調成することが出来るが、ただ靛青のみは必ず數日を要する。他の衆々の色は、春夏秋冬何時でも宜しいが、ただ靛青のみ、膠を入れ、研つて細かくし、水飛し、滓を除くことは、夏の日が宜しいのであつて、炎天に曬し乾かして、火の力を假らないのである。若し急に必要があるときは、止むを得ず火を以て熬るのであるが、但し餘りに枯焦びないやうにするが宜しい。花卉を畫くには、世人は只だ麝脂と胡粉との色の用が多いことを知つて居る。けれども花と葉とは各々照り合つて居るものであつて、若し葉の色が善くないときは、花の容も美しくしさを減するのである。靛は綠を助け、綠は紅を助け、互に助け合ふのである。その製法は詳かに畫傳初集の中に説いてあるので、ここには再び説かない。



藤黄

名筆管黄者佳其色有老嫩二種嫩則輕清老則重濁合色自宜嫩者用水浸化不可近火近火則凝滯皆滓矣若著黄色花頭淺者仍以黄染深則用赭染或脂染靛與藤黄合成綠色亦有三種用分深淺老嫩也

深綠靛七黄三宜著山茶桂橘之葉鈎染純用靛青

濃綠靛黄相等宜著一切濃厚之葉鈎染用深綠

嫩綠靛三黄七宜著一切木本嫩葉草花梗葉及深綠之反葉鈎染用濃綠又有一種最嫩之葉全用黄著以脂染脂鈎靛以綠粉

【譯】筆管黄と名づくる者佳なり。其色に老嫩の二種有り。嫩なるは則ち輕清にして、老なるは則ち重濁なり。色を合はすには自ら嫩なる者を宜しとす。水を用ひて浸化し、火に近づくと可からず。火に近づければ則ち凝滯して皆滓たり。若し黄色の花頭に著くるに、淺き者は仍つて黄を以て染め、深きは則ち赭を用ひて染め、或は脂をもて染む。靛と藤黄と、合して綠色を成す。亦、三種有り。用ひて深淺老嫩を分つなり。深綠。靛七黄三。山茶・桂・橘の葉に著くるに宜し。鈎染するには純ら靛青を用ふ。

濃綠。靛黄相等し。一切の濃厚の葉に著くるに宜し。鈎染するには深綠を用ふ。

嫩綠。靛三黄七。一切の木本の嫩葉、草花の梗葉及び深綠の反葉に著くるに宜し。鈎染するには濃綠を用ふ。

又、一種の最嫩の葉有り。全く黄を用ひて著け、脂を以て染め、脂をもて鈎し、靛するに綠粉を以てす。

【註】第一册九〇頁及び九五頁を参照せよ。○老嫩、濃きと淡きとなり。○綠色、即ち草の汁。○鈎染、鈎は葉の筋又は輪郭などの線描をいふ。くくる。染は、くまどり。○綠粉、草の汁に胡粉を和したるもの。

【解】藤黄は、筆管黄と名づけられて居る者が佳い。其色には老嫩（即ち濃いと淡いと）の二種類が有る。嫩なる者は軽く清くすつきりとして居り、老なる者は重く濁つて居る。色を合はせるには嫩なる者が宜しい。水を用ひて浸し溶かして、火に近づけてはならぬ。火に近づけると、かたまつてしまつて、皆滓になる。若し黄色なる花に着色するに、色の淺い者は黄を以て染め、色の深い者は赭を以て染め、或は脂を以て染める。靛と藤黄とを合はせて綠色即ち草の汁が出来る。それにも三種有る。それを用ひて深淺老嫩を區別するのである。

深綠。靛七分と黄三分と合はせたものである。これは山茶・桂・橘の葉に着色するに宜しい。鈎染するには純ら靛青を用ひる。

濃綠、靛と黄とを等分に合はせたものである。これは一切の濃厚なる葉に著色するに宜しい。鈎染するにはこれよりも稍や濃い深緑を用ひる。

嫩綠、靛三分と黄七分を合はせたものである。これは、一切の木本の嫩葉、草花の梗や葉、及び深緑なる反葉に著色するに宜しい。鈎染するにはこれよりも稍や濃い濃緑を用ひる。

又、一種の最も嫩い葉が有る。これには全く黄を以て著色し、脂を以て染し、脂を以て鈎り、綠粉を以て裏から塗る。

赭 石

須選石色鮮潤、其質不剛不柔、于沙盆中細磨、澄去面上白、并棄脚下粗渣、入膠熬乾、作老枝枯葉、辛夷苞蒂、并用合衆色也。

合墨爲鐵色、著樹根幹。

合脂墨爲醬色、點海棠杏花蒂。

合黃爲檀香色、可染菊瓣。

合綠爲蒼綠色、可點臘梅秋葵苞蒂、并畫樹花嫩枝、草花老梗。

合硃爲老紅、可染菊瓣。

【譯】 須く石色鮮潤にして、其質、剛ならず柔ならずるものを選び、沙盆の中に于て細磨し、面上の白水を澄去し、并せて脚下の粗渣を棄て、膠を入れて熬乾すべし。老枝・枯葉・辛夷の苞蒂を作る。并に用ひて衆色を合はするなり。

墨を合はすれば鐵色と爲る。樹の根幹に著く。  
脂・墨を合はすれば醬色と爲る。海棠・杏花の蒂に點す。  
黄を合はすれば檀香色と爲る。菊の瓣を染む可し。  
綠を合はすれば蒼綠色と爲る。臘梅・秋葵の苞蒂に點じ、并せて樹花の嫩枝・草花の老梗を畫く可し。  
硃を合はすれば老紅と爲る。菊の瓣を染む可し。

【註】 第一冊九五頁を参照せよ。○沙盆、搗鉢の類。

【解】 赭石は、石の色の鮮明にして潤澤あり、其質の剛くも無く柔かでも無い者を選んで、沙盆の中に入れて細かく磨り、上部の白い水を捨て、并に下部に沈澱して居る粗い滓を棄てて、膠水を入れて熬つて乾かすべきである。これは老いた枝や枯れ葉や辛夷の苞蒂に著色するに用ひる。又、他の種々の色に合はせて用ひるのであ

る。

赭石に墨を合はせると鐵色になる。これは樹の根や幹に著色するに用ひる。

赭石に臘脂と墨を合はせると醬色になる。これは海棠や杏の花の蒂に點ずるに用ひる。

赭石に雌黄を合はせると檀香色になる。これに菊の瓣を染めるに用ひる。

赭石に綠を合はせると蒼綠色になる。これは臘梅や秋葵の苞蒂に點じ、并に樹の花の嫩い枝や草花の老いたる梗を畫くに用ひる。

赭石に硃を合はせると老紅色になる。これは菊の瓣を染めるに用ひる。

### 配合衆色

各種綠色、已に附見、旋花、藤黃之後、赭石後亦附載有配合諸色、尙有未盡者、今爲補載、以便配用、旋青加脂爲蓮青、再加粉爲藕合、濃綠加墨爲油綠、淡綠加赭爲蒼綠、藤黃合硃爲金黃、粉紅加赭爲肉紅、加硃爲銀紅、脂加硃爲殷紅、脂加黃爲金黃、五色相配變化無窮、無益花鳥者、不及備載。

【譯】 各種の綠色は、已に旋花・藤黃の後に附見す。赭石の後にも亦附載して配合の諸色有り。尙ほ未だ盡さざる者有り。今爲めに補載して、以て配用に便す。旋青に脂を加ふれば蓮青と爲り、再び粉を加ふれば藕合と爲る。濃綠に墨を加ふれば油綠と爲る。淡綠に赭を加ふれば蒼綠と爲る。藤黃に硃を合はすれば金黃と爲る。粉紅に赭を加ふれば肉紅と爲り、硃を加ふれば銀紅となる。脂に硃を加ふれば殷紅と爲る。脂に黃を加ふれば金黃と爲る。五色相配すれば、變化、窮り無し。花鳥に益無き者は、備に載するに及ばず。

【註】 配合衆色、種々の色を合はせて別の色を出す法を説くなり。○粉紅、胡粉に臘脂を加へたるもの。

【解】 各種の綠色は、已に旋花・藤黃の條の後に附載しておいた。赭石の條の後も、取り合はせて出来る種々の色を附載して置いた。けれども取り合はせて出来る種々の色は、それだけでは盡きないのである。今、ここに補ひ載せて、取り合はせて出来る色を用ひる便に供する。旋青に臘脂を加へると蓮青色になる。その上に胡粉を加へると藕合色になる。濃い草の汁に墨を加へると油綠色になる。淡い草の汁に赭を加へると蒼綠色になる。藤黃に硃を加へると金黃色になる。粉紅に赭を加へると肉紅色になり、硃を加へると銀紅色になる。臘脂に硃を加へると殷紅色になる。臘脂に藤黃を加へると金黃色になる。五色を種々に取り合はせると、變化窮り無いのである。

花鳥を畫くに就いて益の無い者は、ここに備に載せないのである。

和 墨

寫花自不可少墨。有寫色花間以墨葉者。有不用顔色。全以墨描墨點者。墨色全在濃淡分之。花與葉之墨宜一色。但花色内少加藤黃則畫成花葉分明。不異用色矣。

【譯】 花を寫すには自ら墨を少く可からず。色花を寫して間ふるに墨葉を以てする者有り。顔色を用ひずして全く墨描墨點を以てする者有り。墨色は全く濃淡これを分つに在り。花と葉との墨は、宜しく二色なるべし。但し花の色の内に少しく藤黃を加ふれば、則ち畫成りて花葉分明にして、色を用ふるに異ならず。

【註】 色花、繪具を用ひて畫きたる花。○墨葉、墨のみを用ひて畫きたる葉。

【解】 花を寫すには、もとより、墨を缺いてはならぬ。花は繪具を以て寫して居る者も有る。繪具を用ひずして全く墨を以て描き墨を以て點じて居る者も有る。墨の色は全く濃淡を以て區別しなければならぬ。花の墨と葉の墨とは違つた色であるが宜しい。但し花の色の内に少しく藤黃を加へると、畫が出来あがつてから、花と葉と分明と

區別が出来て、色を用ひたのと異ならぬ効果がある。

礬 絹

將生絹自上由左右三面黏檀上。其下未黏一面用細長竹籤鑽眼起伏插穿。曬乾。將細繩穿縫竹籤于檀枋之下。敲開檀之兩邊。用削塞定。再緊收下繩。俾絹平安。先熬廣膠。搗明礬末。冬月膠一兩用礬三錢。夏月膠七礬三。將膠預以滾水浸之。入淨鍋熬開。將礬末入瓷碗中。用冷水浸化。俟膠漸冷。加入礬水攪勻。再加滾水。將檀絹豎于壁間。用排筆由上而下。刷于絹上。曬乾再上。須三次方妙。後二次膠水更宜輕淡。可用滾水加之。則不致膠冷凝滯。若冬月膠水宜微火溫之。至于膠水厚薄須審其彈之有聲則可矣。

【譯】 生絹を將て、上より左右に由る三面は、檀上に黏し、其下の未だ黏せざる一面は、細長なる竹籤を將て鑽眼して起伏して穿挿し、曬し乾かし、細繩を將て、竹籤を檀枋の下に穿縫し、檀の兩邊を敲開し、削を用ひて塞定し、再び下繩を緊收して、絹をして平安ならしむ。先づ廣熬を熬り、明礬末を搗す。冬月は膠一兩に礬

三錢を用ひ、夏月は膠七糝三。膠を將て預め滾水を以て之を浸し、淨鍋に入れて熬開す。糝末を將て瓷碗の中に入れ、冷水を以て浸化す。膠漸く冷ゆるを俟ちて、糝水を加して攪勻し、再び滾水を加へ、檀糊を將て壁間に堅て、排筆を用ひて、上よりして下り、絹上に刷す。曬し乾かして再び上す。須く三次にして方に妙なるべし。後二次は、膠水は更に宜しく輕淡にすべく、滾水を用ひて之に加ふ可し。則ち膠冷えて凝滯するを致さず。若し冬月ならば、膠水は宜しく微火にして之を温ひべし。膠水の厚薄に至りては、須く其の之を彈きて聲有るを審かにすべくして則ち可なり。

【註】第一冊一〇四頁を參照せよ。○檀、梓なり。○黏、糊にて貼りつけること。○鑽眼、穴を幾つもあけること。○穿插、さしこむ。○檀枋、わくのふち。○削、薄く平たいせん。○緊收、ひきしめる。○熬開、煮て溶かす。○浸化、水に浸して溶かす。○攪勻、十分にかきまぜる。○排筆、筆數本を並べ結びて刷毛の如くに作れるもの。支那には刷毛無きを以て排筆を用ふるなり。○膠水厚薄、膠水の厚さの加減をいふ。

【解】絹に糝を引くには、先づ生絹の上と左右との三方を、檀の上に貼り付け、其下のまだ貼り付けてない一方は、幾つかの穴をあけて、細長い竹籤を其穴に穿挿み、曬し乾かして後、細い繩を以て竹籤を檀の枋の下に縫ひ付け、檀の兩側を敲き開き、薄く平たく削つた簽を挿し込んで狂はぬやうにし、それから下の繩を引き緊めて、絹を平かにし、たるみも無く、ゆがみも無いやうにする。先づ廣膠を煎じ、明糝の粉末を

搗つて細かくする。冬には膠一兩毎に明糝三錢を用ひ、夏には膠七錢毎に明糝三錢の割合にする。膠は預め熱湯の中に浸し、清淨なる鍋に入れて熬て溶かす。明糝は瀬戸物の碗の中に入れて、冷水を以て浸して溶かす。膠がだんぐりに冷えるのを待つて、明糝水を入れて十分に攪きませ、それから熱湯を加へ、それから檀に貼つた絹を壁に豎てて、排筆に膠水を含ませて、上の方から漸次に下の方に、絹の上に横に引く。そして曬し乾かして再び引く。三回引くと妙である。後の二回は、膠水を一層薄くするが宜しく、熱湯をそれに加へるのである。さうすると、膠が冷えて凝り滯ることが無い。若し冬ならば、膠水を微火で温めるが宜しい。膠水を引く厚薄の加減は、乾いてから絹を彈いて音のするやうであれば宜しいのである。

糝 色

絹畫上、如用青綠硃砂厚重之色。恐裱時脫落顔色。須于未落檀時上輕糝水一道。其糝之輕重、須嘗之略帶滋味可也。糝時用筆輕過、不可使其停滯。反増痕跡耳。若背後有襯青綠、則亦宜糝之。

右設色諸法。係繪事秘傳。茲不憚艱辛。多方訪輯。委曲詳盡。爲後學津梁。慎毋忽焉。

西冷沈心友因伯氏識

【譯】 絹畫の上に、如し青綠硃砂厚重の色を用ふれば、裱する時に顔色を脱落せんことを恐る。須く未だ體を落さざる時に于て、輕礬水を上すこと一道すべし。其礬の輕重は、須く之を嘗めて略ぼ滋味を帶ぶべくして可なり。礬する時、筆を用ふること輕く過ごし、其れをして停滯せしむ可からず。反つて痕跡を増さんのみ。若し背後に青綠を視する有れば、則ち亦宜しく之を礬すべし。

右の設色諸法は、繪事の秘傳に係る。茲に艱辛を憚らず、多方訪輯し、委曲詳盡して、後學の津梁と爲す。慎んで忽せにする毋かれ。西冷の沈心友因伯氏識す。

【註】 礬色、繪具の上に礬水を引くこと。○津梁、わたし場と橋。事を爲すにたよりとなるもの。手引、案内などの意。

【解】 絹本の畫に、若し石青・石綠・硃砂などの厚く重い色を用ひてあるときは、裱装する時に顔色が脱落る恐れがあるので、これは、必ずまだ體からはづさない時に、一わたり輕い礬水を引いて置くべきである。其礬水の輕重の加減は、それを嘗めて

少しく滋味を帶びてゐる位の程度で宜しい。礬水を引く時には、筆を輕く用ひて、停滯させてはならぬ。筆が停滯すると、反つて痕跡を増すやうになる。若し絹の背後にも石青・石綠を塗つて有るならば、背後にも礬水を引いて置くが宜しい。

右の設色の諸法は、繪事の秘傳である。ここに艱難辛苦を憚らず、種々の方法を以て訪求採集したのであつて、詳細に説明して、後學諸君の手引とするのである。慎んで輕忽にしてはならぬ。西冷の沈心友因伯氏識す。

301  
40

全譜芥子園畫傳

第三十冊翎毛花卉(下)

昭和十年十二月十五日印刷  
昭和十年十二月二十日發行

預約會費  
壹圓零拾錢

編者	小杉放庵
編者	公田連太郎
發行人	北原義雄
印刷所	東京市豊島區高田南町一丁目一九五 美術印刷株式會社
製本所	東京市牛込區西五軒町三四 福山印刷製本所
發賣所	東京市牛込區西五軒町三四 福山書店

發行所  
東京市牛込區喜久井町三四  
アトリ工社

電話牛込六四二一番  
振替東京六六〇二番

301  
40



終

